



TITLE:

呉梅村研究(後篇)

AUTHOR(S):

小松, 謙

CITATION:

小松, 謙. 呉梅村研究(後篇). 中國文學報 1989, 40: 76-125

ISSUE DATE:

1989-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177454>

RIGHT:

吳梅村研究（後篇）

小 松 謙
富山大學

六

以上述べてきた梅村の性格・生活を前提とした上で、以下彼の詩文について考察してみたい。

さきにも述べたように、彼はその幼少年期を完全な復古派的環境の下におくった。したがって彼がその創作活動の出発点においては復古派の陣營に属すべき人物であったことには、おそらく疑問の餘地はあるまい。ただその「復古」の内容が、既に李夢陽・李攀龍の當時のそれからは完全に變質してしまっていることも、前述した通りである。梅村が最も傾倒していた人物は、復古派末期の指導者である王世貞・張溥の兩人であった。しかし王世貞は晩年元白を許容し、更には宋詩愛好にまで至り、張溥は六朝文學を鼓吹

した。彼ら自身においては結局大きな成果をあげるには至らなかったこうした變化が、その間接・直接の弟子である吳梅村において開花したとみることは、誤りではあるまい。ただ、彼が復古派出身であったことは後世の評價に影響を與えずにはいなかった。例えば趙翼は『甌北詩話』でこういう。

而今日平心而論、梅村詩有不可及者二。一則神韻悉本唐人、不落宋以後腔調、而指事類情、又宛轉如意、非如學唐者之徒襲其貌也。一則庀材多用正史、不取小說家故實、而選聲作色、又華豔動人、非如食古者之物而不化也。蓋其生平、於宋以後詩、本未寓目、全濡染於唐人、而已之才情書卷、又自能瀾翻不窮。故以唐人格調、寫目前近事、宗派既正、詞藻又豐、不得不推爲近代中之大家。⁽¹¹⁾

今日虚心坦懷にみて、梅村の詩には餘人の及びえない點が二つある。一つはその神韻がことごとく唐人にもとづいており、宋以後の調子に陥ることなく、しかも事實や感情をうたうさまは自由自在、唐詩をまねる

ものが表面だけを模倣しているのとは違うということである。今一つは材料として多く正史を用い、小説家の故實を取らず、しかもその音聲・色彩は豔麗にして人心を動かすに足るものがあり、古えをまねるものの消化不良をおこすさまとは異なる。思うに梅村は平生宋以後の詩は原則として読んでおらず、すっかり唐人の風に染まりきりながら、自らの才情と學問は自らその力をはてしなく發揮することができた。それゆえ唐人の格調によって目の前の近事を描き、そのよつたつところは正しいうえに詞藻も豊かでありえたのだから、近代中の大家として推さざるをえまい。

ここにいう「唐人の格調を以て目の前の近事を」彼自身の言葉でうたうというのは、確かに彼の詩の長所を適確にいいあてた表現ではあるが、この博學な人物が「宋以後の詩に於いては本よりいまだ寓目せず」ということは考えられない。この一例にとどまらず、彼の詩を論ずる者は唐詩祖述者という範疇からはずれることをほとんどしない。これは、後述するように別の原因も想定可能ではあるが、主として

その出自に對する先入觀に由來するものではなからうか。ところが同時代人の評價は必ずしもこれと同じではないのである。その代表的な見解は、錢謙益「致梅村書」にみえるものであらう。⁽¹¹⁾この手紙は、梅村が自分の詩集を錢謙益にわたして序を求めたことに對する返事として書かれたものである。そこで錢謙益は梅村の詩を讀えてこういふ。

若其攢簇化工、陶冶今古……則非精求於韓杜二家、吸取其神髓、而飲助之以眉山劍南、斷斷乎不能窺其蘊落、識其阡陌也。

造化の工をあつめ、古今をまとめて文學へと昇華させるには……韓愈・杜甫二家の作品をくわしく追求してその神髓を吸収し、更に眉山(蘇軾)劍南(陸游)を助けとするのでなくては、決してその領域をうかがい、その手法を知ることではできないのである。

杜甫はともかく、韓愈・蘇軾・陸游いずれも他の梅村を論ずる者が決して口にすることのない名である。更に計東は、『江左三大家詩鈔』の「吳梅村先生題詞」で右の手紙を引用している。

夫虞山暮年之詩、心慕手追于眉山劍南之間、顧稱述先生之詩如此、則其自遜爲不如可知。誠非今之驕己凌物者可及也。

虞山（錢謙益）晩年の詩は、眉山・劍南をひたすらに追慕したものであったにもかかわらず、その彼がかえって梅村の詩をこのような表現を用いて稱讃しているということは、つまり自ら謙遜して梅村には及ばないといっているのは明らかである。まことに今のプライドばかり高くすぐ人を馬鹿にしたがる徒の及ぶところではない。

計東は錢謙益の追隨者⁽¹⁵⁾であり、かつ梅村との關係は、さきにもふれたその梅村宛書簡から見るとあまり良好なものであったとは思えない。その彼が書いたものである以上、その内容がほとんど錢謙益の稱讃に終始するのはやむをえないところであろう。ただここで計東がいうように、蘇軾・陸游こそは錢謙益が最も重視した詩人であった。更に杜甫・韓愈もその愛好するところであり、結局錢謙益自身の好みを梅村におしつけているように感じられるのである。

これはどういうことか。ここで梅村と錢謙益の關係について考察を加えておく必要があるであろう。

錢謙益は明末清初文壇の中心というべき人物である。文學史上彼ほど大きな影響を個人で世に與えた人物は稀であろう。彼はほとんど獨力で全盛を誇った復古派を打倒し、竟陵派を消滅せしめたのである。そして彼以降の文學史は、大味ないかたをすると唐詩派と宋詩派、更に細分すればあるいは初唐・盛唐・中唐・晚唐、あるいは北宋・南宋、あるいは金元、あるいは六朝と、まことに細かい時代區分をそれぞれ旗幟としてかけ、それを祖述する形で展開していく。つまり清という時代の文學上の特質——過去の總括と再編成、及びその基礎に立脚した展開——を定めたのは錢謙益に他ならないのであり、この意味で彼の存在意義ははかりしれないほど大きい。後に乾隆帝は全力をあげて彼の名を消し去ろうとし、事實世から彼の名を記した書物は消滅するに至ったが、それでもなお彼の業績までを消しさることは不可能だったのである。それゆえこの時代の文學について語るとき、錢謙益にふれずにすまずことはできない。

梅村の場合もその例外ではないのである。

さて、錢謙益が詩においては復古派排撃、文においては唐宋派支持（この點についてはよく認識しておく必要がある。明代唐宋派の活動はほとんど文のみに限られており、宋詩の祖述者は公安派以前にはほとんど存在しない）の姿勢を明確に示している以上、梅村がもし終生復古派でありつづけたとすれば、錢謙益に對しては極めて批判的でなければならぬはずである。しかし實態は必ずしもそうではない。そもそも自分の文集のために序を依頼するという行為がすでに好ましくない相手には通常することのありえないものである。無論盛名ある錢謙益の序を自らの文集に冠することによって、自分の名にも箔をつけようという意圖がそこにあったと考えることも可能ではあるが、しかし兩者の親交が決して浅いものではなかったことは、彼の文集からも明らかである。

この點について考える前に、現存する梅村の文集の性格を把握しておく必要がある。現在傳わる彼の集の基本となっているのは康熙七年刊行の『梅村集』四十卷である。

吳梅村研究（後篇）（小松）

これは顧湄・許旭という彼の最も親しい弟子達が編集した形式になっているが、おそらくは梅村自身の手になるものであろう。以後の『吳詩集覽』以下三種の注釋本は皆これに基く。しかるに清末宣統年間に至って鈔本の『梅村家藏稿』が発見され、出版されるに至る。その中には通行本にはみえない作品が多く含まれ、詩においてはその數七十三首にのぼる。しかしこれですべてというわけではもとよりなく、『江左三大家詩鈔』がその凡例で「其れ未だ刻せざる新詩の載するものは實に多し」というように、『梅村集』『家藏稿』に含まれない作品を多く収めるのをはじめとして、諸書に見える詩は多く、葉君遠氏はすでに『家藏稿』未收の詩四十九首を収集したという。⁽¹¹⁾ 文にしてもさきに彼と演劇の關係について論じた部分で引いた三篇の序や宋謙の文集の序など、⁽¹²⁾ 『家藏稿』に收められていないものは甚だ多い。まことに、靳榮藩が『吳詩談藪』で繰り返し歎じているように、梅村の佚詩・佚文は甚だ多いのである。これはなぜか。文集から除外された作品を検討してみると、その理由の一斑は明らかとなる。即ち、その多くは明代に

おける邊境問題——對清戰爭をうたった詩と、清朝に對し

て批判的な口吻をもらした作品なのである。前者はさきの四十八首中『江左三大家詩鈔』以外の選本から集められたもののおよそ半ばを占め、また後者が『梅村集』にはなく『家藏稿』のみに見える作品の大半を占めることは、一讀しただけでも明らかである。こうした作品が削られた理由は明白であろう。その他、『江左三大家詩鈔』所收の諸作の如きは、特に削除されねばならない理由の見出し難いものが多いが、おそらくこれは梅村自身意に滿たない作品だったためであろう。つまり梅村は、その持ち前の慎重さもしくは臆病さゆえに、自らその文集を編集して、不満な作と自分の身に危険を及ぼす恐れのある作品とを削除しているわけである。それゆえ梅村の文集からその交友關係をあとづけようとするとき、こうした事情を前もって考慮しておかねばなるまい。例えば彼の親友であつた陳子龍の名は、文集詩話には散見するものの、唱和した作が梅村の側には——陳子龍側にはあるにもかかわらず——傳わっていないという事實は、陳氏が清朝に抵抗したという點から説明

しうるものであろう。

梅村と錢謙益兩人の文集を比較してみると、錢謙益の側には梅村に關わる記述がかなり多いのに比し、梅村の側から錢謙益の名を出している場合は大變少ない。これはさきに述べた梅村の文集の性格からしても、必ずしも額面通りにうけとるわけにはいくまい。錢謙益が抵抗運動の中心人物であつたことから考えて、梅村がその名を文集中に留めることを危険であると考えた可能性は充分にあり、また江南で疑獄事件がおこるたびに身の危険を感じていた梅村が、黃毓祺案・入江案などその多くに關係していた錢謙益のまきぞえとなることを恐れて、事件發生と同時に關聯文書を處理していた可能性も否定できない（乾隆帝による錢謙益抹殺は無論後年のことであり、公的には當時錢謙益の名を忌避せねばならない理由は何もなかった）。以上のことを念頭においた上で、以下梅村と錢謙益の交際と、兩者のいささか微妙な關係について考察を加えてみたい。

兩人がしばしば會っていたことは間違いない。これは太倉と常熟が隣縣同士であり、太倉州城から常熟縣城まで直

線距離にしてわずか六十キロ前後しかないことを考えると、當然のことといえよう。二人が會った記録は、ここまで述べてだけでも『琴河感舊』が詠まれた折常熟で一度、更にさきにひいた錢謙益の手紙にも少し前に常熟で對面した旨記されているようである。その他『梅村詩話』には梅村が楊廷麟と張溥の屋敷で會つて「臨江參軍」をつくつた折程嘉燧が「髯參軍圖」を描き、錢謙益が短歌を一首つくつたという（この時の錢謙益の作は傳わらない⁽¹⁹⁾）。また『家藏稿』卷八にみえる「觀棋六首」には「和錢牧齋先生」と自注があり、錢謙益「後觀棋絕句六首」と一部の韻が共通する點から見て、同時の作であらうと思われる。また右の詩と同じ『家藏稿』卷八にみえる「題歸玄恭僧服小像」四首は、順序からいってやはり常熟での作と思われるが、錢謙益に順治十五年の同題の作があり、やはり唱和したものであるかと思われる。ただ『家藏稿』卷八は梅村出仕前の作を収める部分であり、當然年代的にあわない。あるいは後述の「琴河感舊」のケースと同様、錢謙益が後に和したものかもしれない（ただし韻は一致しない）。

吳梅村研究（後篇）（小松）

更に梅村は、才女黃媛介⁽²¹⁾のことをうたった「題鴛湖閨詠」第三首で錢謙益・柳如是夫婦のことをうたって「江南に淪落す老尚書」とやや揶揄の口調でいうのは、兩者の氣安い關係を暗示するかの如くである。錢謙益の側から梅村におくった作は更に多く、詩においては梅村が出仕する際の「送吳梅村宮諭赴召」⁽²³⁾、梅村が五十四にしてはじめて長子をもうけた折におくった「梅村官相五十生子、賦浴兒歌十章」、更にさきに下王京の項でふれた「琴河感舊」に後から和した詩「讀梅村官簪豔詩有感書後四首、有序」⁽²⁵⁾があり、また文においてはこれもさきにあげた「致梅村書」と「梅村先生詩集序」⁽²⁶⁾、更には梅村の父吳琨のために「吳封君七十序」⁽²⁷⁾をも書いている。つまり兩人はいたつて親密であつたといつてさしつかえあるまい。

また兩人と各々の門弟との間でもかなり往來があつた。錢謙益は、梅村の弟子である太倉十子のメンバーの中王朴・王樞・黃與堅の集には序を、⁽²⁸⁾顧湄の詩には題辭を、その義父顧夢麟の集には序を、⁽²⁹⁾更には「婁江十子集」⁽³⁰⁾（恐らく「太倉十子集」のことであろう）の序まで書いている。中

でも黃與堅の序では「他日梅村とともにこれを極論せん」とまでいう。一方錢謙益の弟子も、歸莊の如きは梅村から季振宜あての紹介状を書いてもらい、また梅村のために六十壽序を書いて梅村を錢謙益の弟子と稱している。また瞿式耜と梅村が親交があったことは先述した通りであり、もう一つ奇妙な縁になるが、錢謙益歿後錢曾を使喚して錢氏家難をひきおこし、柳如是を自殺においやった錢朝鼎とも梅村は交際があった。⁽¹⁴⁾

では彼らの文學觀はどうか。本來ならば相反する立場にあったはずの兩人は、どこまで歩み寄れたか。この点について考察を加えることにより、復古派の立場から出發した吳梅村の文學觀がいかなる演變をとげたかをたどることが可能となるう。

梅村の錢謙益に對する發言は、この他人を毀譽褒貶することの少ない人物としては、例外的に多いということができよう。まず梅村がその最晩年——康熙九年——にかいた「龔芝麓詩序」⁽¹⁵⁾にいうところを検討してみよう。この時錢謙益は既に歿しており、梅村としても忌憚のない意見を述

べることができたはずである。

牧齋深心學杜、晚更放而之於香山劍南、其投老諸什爲尤工。既手輯其全集、又出餘力以博綜二百餘年之作。其推揚幽隱爲太過、而矯時救俗以至排詆三四鉅公、即其中未必自許爲定論也。誠有見於後人之駁難必起、而吾以議論與之上下、庶幾疑信往復、同做天壤。而牧齋之於詩也、可以百世。

牧齋は一心に杜甫を學び、晩年には更にこれをすてて香山（白居易）・劍南（陸游）へとはしった。その老年の諸作はことにたくみである。自分の全集を自ら編集してしまふと、更にその餘力を出して明朝二百餘年の作『列朝詩集』のことであろうを博くあつめたものである。ただ無名詩人を稱揚すること程度がすぎ、また間違つた方向に走つた世俗を救うために三、四人の大人物をそしるに至っているあたり、その中に自ら定論とは考えていなかったものもあるようである。後人の反論がおこるにちがいないことははっきりしており、私も彼と議論をたたかわせたが、いくら議論しても天地が亡

びるまで續きそうであつた。だが牧齋の詩は、百世に傳えるに足るものである。

ここで梅村は錢謙益の詩人としての實力に對しては「以て百世たるべし」と最大級の讃辭をおくっているが、その評論活動——主として『列朝詩集』——に對しては異論があつたようである。兩者の見解の最大の相違點は『列朝詩集』において「その幽隱を推揚することはなほだ過ぎたりとなす。しかして時を矯め俗を救わんとして三四の鉅公を排訾するに至る」ことであつた。「幽隱」——無名詩人——とは、公安派及び程嘉燧・李流芳の徒のことであろう。「三四の鉅公」とは無論李何王李をさす。つまり吳梅村はかつて復古派を擁護して錢謙益と論争を展開したのであり、最晩年に至るまでついに復古派の心情から離脱しえなかつたことをこの言は示す。しかし一方で錢謙益を「深心杜を學び、晩には更に放ちて香山・劍南にゆく」という表現を用いて稱讃していることは、彼が白居易・陸游に對しては高い評價を抱いていたことを意味しよう。

梅村のこの批判は、「太倉十子詩序」⁽¹³⁾においてより尖銳

吳梅村研究（後篇）（小松）

的な形であらわれる。

輓近詩家好推一二人以爲職志、靡天下以從之、而不深惟源流之得失。有識慨然思拯其弊、乃訾駁排擊、盡以加往昔之作者、而豎儒小生一言偶合、得蹤而躋於其上、則又何以稱焉。即以瑯琊王公之集、觀之其盛年用意之作、瓊詞雄響、旣芟抹殆盡、而晚歲隳然自放之言、顧表而出之、以爲有合於道。詘申顛倒、取快異聞、斯可以謂之篤論乎。

最近の詩人は一、二人の者を指導者として推し、天下をあげてこれに従つてしまひ、深くその源と流派の得失について考えてみようとしなかつた。そこで有識者が慨然としてこの弊を正さんとして立ちあがつたまではよかつたのだが、それがかえつて過去の作家にはありとあらゆる惡口雜言をなげつけておいて、ちよつとうまいことを言つただけのつまらない連中をその上においていたりするのだから、いったいこれを何といったらよいものやら。その言い草ときたら、瑯琊の王公（王世貞）の集の中で、壯年期に精魂傾けた作品はその

すぐれた言葉、力強い響きをもきれいさっぱり抹殺してしまつて、晩年の弛緩したなげやり氣味の作は表彰して道に合するものだとする。その評價はでたらめで奇のみをてらつたものである。こんなものが立派な議論といえようか。

ここにいう「有識」が錢謙益を、「二人」が鍾惺・譚元春を、「往昔之作者」が李何王李を、「豎儒小生」が程嘉燧・李流芳をそれぞれさはすことは明らかであろう。この言からも明らかなように、梅村が錢謙益に對して感じていた最大の不満は『列朝詩集』における王世貞の評價、特にその「晩年定論」の説であつた。「與宋尚木論詩書」⁽¹⁷⁾における批判も同工のものである。

雖然、此二說者今之大人先生有盡舉而廢之者矣。其廢之者是也。其所以救之者則又非也。……今夫鴻儒偉人、名章鉅什、爲世所流傳者、其價非特千金之璧也。苟有瑕類、與衆見之足矣。折而毀之、抵而棄之、必欲使之磨滅、而游夫之口號、畫客之題辭、香奩白社之遺句、反以僻陋故存、且從而爲之說曰、此天真爛漫、非

猶夫剽竊摹擬者之所爲。……

しかし、この二説（復古派の亞流——摸倣主義者——と竟陵派）は今の「大人先生」によつて完全に退けられた。退けたこと自體は正しい。しかしその救う手段ということになると、やはり誤っている。……大儒偉人の世に傳わる名篇の價值は、千金の璧どころではない。たとへぎずがあつたところで、人にそれを示すだけで充分であろう。これをうちくだき、はらいすて、何としても消滅させようとする一方で、旅人の即興の作や畫家の題詞といった香奩（韓偓）や白社（鄭谷）の流れをくむような句は、逆に通俗的な作であるがためにかえつて殘存し、しかもために説をなしてこういふのだ。

「これは天真爛漫、あの剽竊摸擬をこととする者の作とはわけがちがう。」……

要するに梅村は、程嘉燧らに對する激賞と王世貞に對する非難を我慢しかねたのである。これは彼が本質的に復古派の人間であつたためというよりはむしろ、幼少期から身につけてきた王世貞に對する絶對的な尊敬に由來するものと

みるべきであらう。彼は復古派の弊害をものはっきりと認めているのである。同じ「與宋尙木論詩書」にはいう。

彼其於李杜之高深雄渾者、未嘗望其崖略、而剽舉一二近似、以號於人曰、我盛唐、我王李。則何以服竟陵諸子之心哉。

李白・杜甫の高深にして雄渾なる點はそのあらましも知らぬくせに、似たようなものをでっちあげて、世間にむかつてこうよばわるのだ。「私は盛唐派だ、私は王李派だ。」こんなことでどうして竟陵派の人々の心を納得させることができるのか。

では結局のところ彼が自らの古典とするものは何なのか。同じ文で彼はいう。

夫詩之尊李杜、文之尙韓歐、此猶山之有泰華、水之有江河、無不仰止而取益焉、所不待言者也。

詩においては李白・杜甫を尊び、文においては韓愈・歐陽修を尊ぶのは、さながら山に泰山・華山があり、川に長江・黃河があるようなもので、これを仰ぎその恵みを受けぬものとしてないことは、いうまでもあるまい。

吳梅村研究（後篇）（小松）

詩においては李白・杜甫、文においては韓愈・歐陽修とは、今日にあっては至極常識的な發言にみえるが、梅村の立場を考えてみると、實は極めて重要な意味を持っていることに氣づかざるをえない。李杜の詩はともかく、韓歐の文こそはあの唐宋派が鼓吹したところ——つまり復古派から最も忌み嫌われたものなのである。ここでも梅村がすでに七子とは別の道を歩いていることは明らかであらう。唐宋派の文への接近は、いささか皮肉なことに梅村が「太倉十子詩序」で非難していた王世貞晩年の説にはじまるものである。この點でも梅村は復古派中の改良派の血筋をひく者とみなすことができる。

梅村の明代文學全體に對する認識は、「致孚社諸子書」⁽¹³⁾に見える。

弇州先生專主盛唐、力還大雅、其詩學之雄乎。雲間諸子繼弇州而作者也。龍眠西陵繼雲間而作者也。風雅一道、舍開明（開元の誤りか）大曆、其將誰歸。至古文辭、則規先秦者失之模擬、學六朝者失之輕靡、震川毘陵扶袁起敝、崇尚八家、而鹿門分條晰委、開示後學。

若集衆長而掩前哲、其在虞山乎。

弇州先生（王世貞）はもっぱら盛唐を主とし、文學を正道にもどそうとつとめられた。詩學の雄といえよう。雲間（松江）の諸子（陳子龍・夏允彝ら幾社の人々）は弇州の後繼者である。龍眠（未詳。あるいは錢秉鑑をさすか⁽¹⁹⁾・西陵（陸圻以下の「西冷十子」であらう⁽⁴⁰⁾）は雲間諸子の後繼者である。詩の道は、開元・大曆以外に歸すべきところはあるまい。古文ということになると、先秦にならうものは模擬に陥りがちであり、六朝を學ぶ者は輕薄に流れがちであった。震川（歸有光）・崑陵（唐順之）はこの衰退した狀況を救わんとして唐宋八大家を尊び、鹿門（茅坤）はすじみちといきつくべき目標とを明らかにして後學の士に示した。諸家の長所を集めて先賢をしのぐ者といえば、虞山（錢謙益）にとどめをさすであらう。

つまり唐においては王世貞・陳子龍ら復古派を支持するが、開元（盛唐）のみならず大曆（中唐、特に大曆十才子の類）をもとるあたりは、やはり彼の改良派たる一面を示すものであ

らう。一方文においては梅村は唐宋派に與する。ここで錢謙益を「衆長を集めて前哲を掩う」と評價するのは、文脈からみるとその文について言っているようであるが、ともあれこれまでにひいてきた諸篇からみても、梅村が錢謙益を『列朝詩集』の問題を別にすれば、尊敬に價する大家とみなしていたことだけは間違いない。その『列朝詩集』に對する嫌惡も、一つには王世貞に對する本能的な尊敬に由來するものであらうが、同時にまた争いを好まない彼の性格からして、錢謙益を中心とした詩派をめぐる激しい抗争にたえきれなかったこともその要因となっているのではなからうか。「與宋尙木書」ではいう。

當今作者固不乏人、而獨於論詩一道、攻訐門戶、排詆異同、壞人心而亂風俗。

今の作家にも無論人材が少なくない。しかし詩論という一點においては、各々他派を攻撃し、意見を異にする者をそしり、人の心をだいなしにし、風俗を亂すに至っている。

こうした詩派の争いに對する嫌惡は、その性格に由來する

ものであると同時に、黨社の指導者であつた彼にとって、こうした争いは組織の分裂をもたらす危険性に直結するものと思へたことも、その一因だつたであろう。「致雲間同社諸子書」⁽⁴¹⁾は鼎革後松江・太倉一帯でたえずくりかえされていた復社・幾社殘黨の間の内輪もめに對する警告であり、また「致孚社諸子書」でも再三「意見を化すること」を要求している。そして彼の詩派に關する意見の結論は、次のようなものであつた。

然則爲詩之道何如。曰亦取其中焉而已。

では作詩の道はどうあるべきなのか。答は、中道をとるといふことにつきる。

「その中を取る」とは、錢謙益のように復古派を全面否定はせず、といつて模擬の弊にも陥らないようにするといふことであろう。まことに單純ではあるが、たしかに確論である。彼がこのような説を唱えることができたといふことは、つまり彼が特別な獨自の文學觀といえるものを持つていなかったことを、逆説的に示すものであろう。

以上の資料から梅村の錢謙益に對する態度は既に明らか

吳梅村研究（後篇）（小松）

であろう。梅村は錢謙益を尊敬していたが、『列朝詩集』だけは許容できなかったのである。『列朝詩集』について梅村が抱いていた微妙な感情は、この詩集をめぐる生じた名高い中傷事件において、いささか不名譽な形で露呈している。梅村や陳子龍の友人であり、また青年時代柳如是の愛人であつたといわれる宋徵輿（清詩紀事初編）卷三吳偉業の項で宋徵璧とするのは誤り。詳しくは陳寅恪『柳如是別傳』第三章（上卷八六頁以下）參照が、『列朝詩集』は程嘉燾、『穢史』（錢謙益が編纂した明朝史。公刊前に絳雲樓の火災で焼失）は王士禛（世貞の子）の手になるものを錢謙益が竊んだのだと誣い、梅村の名を證人としてあげたのである。このことを聞いた朱鶴齡は次のような手紙を送つて梅村を難詰した。その文面にはいふ。

……憶先生昔年枉顧荒廬、每談虞山公文章著作之盛、推重誼誼、不啻義山之歎韓碑。乃客有從雲間來者、傳示宋君新刻、於虞山公極口詬訾、且云、其所選明詩出於筆（當作書）儲程孟陽之手、所成評（當作機）史乃掩取太倉王氏之書。愚閱之不覺噴飯。……宋君乃用此爲譏

譏耶。鵲巢鳩居、厚誣宗匠、不足當識者之一笑。而愚敢斥言之於先生者、以其文援先生爲口實也。先生夙重虞山公文章著作、豈有以郭象莊解、齊丘化書、輕致訾謷者。愚以知先生之必無是言也。先生誠無是言、當出一語自明、以間執讒慝之口。如其默默而已、恐此語焚惑見聞、好事之徒將遂以先生爲口實、而語穽心兵之險、流於筆墨文字間者、間起競作、無已時也。⁽¹⁴⁾

……今でもおぼえておりますが、昔先生が私の家におこしになった折、虞山公（錢謙益）の著作の立派さを語るときに、くり返しこれを重んじられましたことは、義山（李商隱）の韓愈の碑文に對する稱讚にもたちまざるほどのものでありました。ところが松江から來た人がおりました、私に宋君（徵興）の新作を見せてくれたのですが、その中で宋君は口を極めて虞山公のことを罵ったうえに、こんなことまでいっているではありませんか。「彼が選んだという明詩の選集『列朝詩集』は寫字生程孟陽（嘉慶）の手になるものであり、彼が書いたという『機史』は太倉の王氏（世貞・士驥父子）の書

を丸寫したものである。」私はこれを讀んで思わず噴き出してしまいました。……（歴史書を著する場合他の文獻を藍本とするのは當然であることを例をひいて述べ）……なのには宋君はこのことゆえに騒ぎたてようといわれるのでしょうか。小人の身で大家にひどいいいかりをつけようとするこんな所業は、有識者にとっては笑いのにするのも馬鹿らしいような下劣なものと申せましょう。にもかかわらず私がこれを非難する言葉をあえて先生のもとに書き送りましたのは、宋君の文が先生の言葉を引いて根據としているからです。先生は以前から虞山公の文章・著作を重んじておられたのですから、郭象が向秀の『莊子』注を竊んだとか、宋齊丘が譚峭の『化書』を自分の作と偽ったとかいった例と一緒にして輕々しく非難したりなさるはずがありません。ですから私には先生がこんなことをおっしゃたはずはないとわかっております。先生が本當にこんなことをおっしゃったのでなければ、一言いってご自分の立場をはっきりさせることによって、中傷者の口

を封じるべきでしよう。もしずっと沈黙を守られるのみであつたなら、おそらくこの言葉が世の人の見聞を惑わし、事を好む連中は先生を根據とするようになりましよう。そして言葉によるおとし穴、害意を抱いた心といった陰險な要素をもった文が競ってかかれ、やむことをしらぬという有様となつてしまふでしよう。

梅村がこれに答えた形跡はない。彼の沈黙を宋氏の説の是認ととるべきか、あるいは例の如くトラブルにまきこまれるのを避けただけのことととるべきかは定めがたい。またかりに梅村がこのような誣言を吐いたのが事實だったとしても、その目的とするところが何であつたかは、やはり定めがたい。錢謙益を中傷しようとしたのか、あるいは『列朝詩集』の信頼性をゆるがせようとしたのか。ともあれここに梅村の反『列朝詩集』の感情が感じとれることは間違いない。

梅村の文集で錢謙益の文學に言及している例は以上につきるが、實はこれ以外にも學問的側面において、錢謙益からの影響とはつきりみなしうる事例がある。即ち元代發學

派の尊崇である。「陳百史文集序」⁽¹⁴⁾にはいう。

明初宋文憲公以大儒而膺佐命。……文憲雖典司文章、不與機務、又得黃潛柳貫之徒倡明發學、……且自文憲公後三百年來、紹修絕學者不過數家。

明初に宋文憲公（濂）は大儒の身で大臣となつた。……文憲は文事を典るのみで要務には關係しなかつたものの、黃潛・柳貫の徒が提唱した發學の教えを受けた。……文憲以後三百年來、紹修をつぐ者は數家にすぎない。

また「古文彙鈔序」⁽¹⁴⁾にはいう。

若夫韓歐大家之文、後人尊而奉之、業已家昌黎而戶廬陵。然君子以爲元末諸儒所爲發學者、其於八家、講求各有本原。所當博稽以要其歸、未可於尺幅之內、規規而趨之也。

韓愈・歐陽修等唐宋八大家の文は、既に後世の人々が皆尊んでこれを奉じ、みな昌黎（韓愈）だ、廬陵（歐陽修）だといつてまねている。しかし君子は次のように考える。元末の諸儒が修めた發學にあつては、その

八家への追究にはそれぞれ基くところがあった。(このように古文について考えるにあたっては) 廣い範圍のものを検討したうえで歸するところを定めるべきであつて、わずかなものだけを見てせましくそちらに走るようではいけないのである。

錢謙益がやはり婺學派と宋濂を重んじたことは、吉川幸次郎博士がつとに指摘されたところであるが、「陳百史文集⁽¹⁶⁾序」にいうところは、「文憲公より後三百年來、絕學を紹修せる者は數家に過ぎず」というあたりまで、ほとんど錢氏の言と同じであり、「古文彙鈔序」の所説からは、結局彼が文においては復古派の立場から離れて錢謙益の同調者となつたことがよみとれるのである。ここに錢氏の影響を見出すことは、不當ではあるまい。

以上、吳梅村の錢謙益に對する評價について、その文を手がかりとして考察してきたわけであるが、實はその文集において梅村が自らの文學觀について語っている部分は、ほとんどこれにつきるのである。これ以外に彼の主張で特にとりあげるに價するのは、既に何度かふれてきた詩文の

創作にあたっては經書に依據すべしとの主張ぐらいのものであらう(彼の文には實際經書からの引用が多い)。つまるところ吳梅村は、詩においては唐を模範とし、文においては唐宋をとることを主張はするものの、その主張の仕方にはほとんど論理性は感じられず、ただ漠然と己れの感ずるところを述べているだけであり、また彼の文學にどの程度その主張が生かされているかも定かではない。究極のところ梅村はやはり理論ではなく本能によって詩をつくる人物なのである。それゆえ彼の文學の性格について考えるには、他者の評價と作品自體から摸索していく以外にならう。次に錢謙益の側が梅村をどのように評價していたかについて検討してみたい。

錢謙益が梅村におくった手紙の中で彼を一風變つたやり方でほめてゐるのはさきに見た通りであるが、更にこの折の求めに應じて書かれた「梅村先生詩集序」では梅村に對して最大級の讃辭をささげている。

梅村之詩、其殆可學而不可能者乎。夫詩有聲焉、宮商可叶也。有律焉、聲病可案也。有體焉、正變可稽也。

有材焉、良慙可攻也。斯所謂可學而能者也。若其調之鏗然、金春而石曼也。氣之熊然、劍花而星芒也。光之耿然、春浮花而霞侵月也。情之盎然、草碧色而水綠浪也。……以此論梅村之詩、可能乎、不可能乎。

梅村の詩は、學ぶことはできるが、いくら學んでも凡人はその域には達しえないものといえるのではあるまいか。詩には音聲があり、その響きを整えることができる。平仄の規則があり、その誤りについて考察することはできる。スタイルがあり、本来のものが崩れたものを検討することはできる。題材があり、そのよしあしを研究することはできる。これがさきへのべた學ぶことによつて達成することのできるものである。だが金屬や石をうちつけるような高らかなびきをもつリズムや、劍からとびちる火花や星の光の如く輝しい精神、春の水に浮く花や朝やけが月をおおいゆくさまの如く明るいきらめき、みどりの草、あおい水の如くにゆたかな感情といったものは、……これによつて梅村の詩を論ずれば、彼の詩の境地は凡人に達しうる

吳梅村研究（後篇）（小松）

か、達しえないか、（おのずと自明であらう）。

つまり梅村の詩は確かな學問的基礎をふまえた上で、しかもその天才を自在に發揮したものであつて、凡人には及びえないとするのである。これは梅村の詩が華麗な典故を驅使しながら、獨特のリズム感と韻律の美しさをもつその長所を的確に表現したものだといえよう。

今一つ重視すべきは、さきに下玉京の項でもふれた「讀梅村宮詹豔詩有感書後」四首とこれに附された序である。

この作品は、吳下兩人が錢謙益の努力にもかかわらずれちがいにおわつた折梅村がつくつた「琴河感舊」四首に後から和したものであり、その序に述べるところ、更には梅村が『梅村詩話』で加えたコメント、いずれも甚だ興味深いものがある。序で錢謙益はいう。

余觀楊孟載論李義山無題詩、以爲音調清婉、雅極穠麗、皆託於臣不忘君之意。……頃讀梅村宮詹豔體詩、見其聲律妍秀、風懷惻愴、於歌禾賦麥之時、爲題柳看花之句、徬徨吟賞、竊有義山致堯之遺感焉。

私が楊孟載（基）の李義山（商隱）の無題詩を論じた文

を讀んだところ、こう書いてあった。その音調は清らかになまめかしく、この上なく華麗ではあるが、その中に臣たるもの主君を忘れはしないという氣持が託されているのだ。……（韓偓の豔詩も同様であることを述べて）……最近梅村宮詹（梅村の弘光朝における官名少詹事のこと）の豔體詩を讀んだが、その聲律はあでやかに美しく、しかもそこにこめられた思いはいたましく、「木黍」「麥秀」の如き亡國のうたをうたうにあたって、あえて色事をうたう句を用いたような趣きがあり、そぞろ歩きしつつ吟じめるに、義山・致堯（韓偓）の詩と同様の印象をうけた。

いわんとするところは、梅村の豔詩は世のただ華やかなだけの豔詩とは異なり、その中には亡國の悲哀が秘められているというにある。梅村は豔詩をもって名があり、その形式により亡國の悲哀をうたうことによってより一層の哀感を加えるという手法は、『秣陵春』にまで應用される梅村得意の行き方であって、その意味では錢謙益のいうところは確論といえよう。しかし奇妙なことに、この場合には錢

謙益の説は實態にそぐわないのである。それゆえ梅村は、『梅村詩話』でいささか皮肉なコメントを加えることとなる。

……而牧齋讀余詩有感、亦成四律。其序曰、……詩絕佳、以其談故朝事、與玉京不甚切、故不錄。末簡又云、小序引楊眉庵論義山臣不忘君語、使騷人詞客見之、不免有兔園學究之誚。然他日黃閣易名、都堂集議、有彈駁文正二字、出余此言爲證明、可以杜後生三尺之喙、亦省得梅老自下注脚。其言如此。……余有聽女道士彈琴歌及西江月・醉春風填詞、皆爲玉京作、未盡如牧齋所引楊孟載語也。此老殆借余解嘲。

……そして牧齋（錢謙益）も私の詩（「琴河感舊」）を讀んで感ずるところがあったとみえて、やはり四首の律詩をつくった。その序に曰く、……（序を引用）……詩は大變すぐれた出來だが、明朝のことを語っていて玉京とはあまり關わりがないので、ここには記さない。詩のあとに更にこう記されている。「小序に楊眉庵（基）の義山臣として君を忘れざるの語を論じた文を引用し

たが、歴とした詩人の方々がご覧になれば、田舎教師のつまらぬ學問誇りのそしりは免れがたいものがある。だが他日大臣の顔ぶれがかわり、新大臣たちが相談して「文正」という諡號は實態にそぐわないと攻撃するような目にあつたなら（司馬光が新法黨により文正の諡號を奪われたことをさすか。明が復興した場合のことを暗示しているのかもしれない）、私のこの言葉によって身の證をたて、若い連中の口を封じることができようし、梅老もわざわざ自分で注解を書く面倒がなくなるといふものだ。」こういうことを書きつけていた。……私には「聽女道士彈琴歌」及び「西江月」「醉春風」の詩餘の作があり、いずれも玉京のためにつくつたのだが、そのすべてが牧齋がひいた楊孟載の言の如き内容であるわけではない。このお方はおそらく私をだしにつかつて自己辯護をなさつたのだろう。

梅村にいわせると、彼の豔詩は錢謙益のいうようなご立派なものではないらしい。それにしても錢謙益は「余を借りて解嘲をなすならん」というのは痛烈である。錢謙益がし

吳梅村研究（後篇）（小松）

ばしば人の言葉なり作品なりを借りて自分の意見を述べ、あるいは「解嘲」することは多くの事例の示すところであるが、梅村の如く露骨にそれを揶揄したものは稀であろう。こうなるとさきの錢謙益が梅村に與えた手紙にいう「韓杜二家に精求し、……これを飲助するに眉山劍南を以てす」云々という言葉も、そこに並べられている名前がすべて錢謙益が愛好し、模範とした詩人ばかりであるだけに、少々怪しくなってくる。梅村が蘇軾に言及することはその文集においてもほとんど皆無であり、また作風にも似通つたものはほとんど感じられず、その間の影響關係は認めがたい。更に、この私信がなぜか世に廣まり、錢謙益の弟子である計東が『江左三大家詩鈔』でことごとしく引用して師をほめたたえるに及んでは、錢謙益が梅村を自派の者であると世にみせかけるための計畫的犯行という印象をぬぐいがたいのである。『梅村詩話』にみえるこの言葉は、そうした錢謙益のやり方に對する梅村一流のまわりくどい反撃だったのかもしれない。

これ以外に同時代人の批評としてあげるべきものは多く

はない。梅村の親友であつた陳子龍は、彼の詩を評して「はなはだ李頎に似たり」と言っているが、その意味するところは定かではない。後に王士禛が『香祖筆記』⁽¹⁹⁾でこの記事を引いて、こと七言に關しては陳子龍は「殆ど古に冠たるの才」であり、「一時の瑜亮(周瑒)と諸葛亮の如き好敵手」、獨り梅村あるのみ」というところからみて、あるいは李頎の七律が王世貞から高く評價されていたことが陳子龍の念頭にあつたのかもしれない。やや時代の遅れる人物としては、徐乾學・王士禛等、ことに名士と交際することに異常な情熱を傾けていた人々が彼に接近してくる。徐乾學については、梅村最晩年にその父開法の墓誌銘を依頼して、甚だ迷惑がられていることが目につく程度で、それ以外には後に顧湄が『通志堂經解』の事實上の編者となるにあつて、あるいはこのラインの影響があつたかと推定されるが如き間接的な關係しか見出しえない。一方、王士禛の方は梅村を師の一人とみなすかのような振舞に及んでいるが、その文學に對する評價としては、右にあげた一條が目につく程度で、特にとりあげるべき發言はない。むしろ注目さ

れるのは彼の古詩平仄論が一説によると梅村から傳授されたものといわれることであり、眞偽の程は別として、このような風説が流れるということは、つまり梅村が聲律に明るい人物として世に認められていたことを示していよう。梅村自身は聲律について何一つ目立った發言をしていないが、あるいはこれは彼が曲の聲律に通じていたことに由來するものかもしれない。

乾隆年間以降の評論として注目すべきは、冒頭でもあげた『甌北詩話』と『四庫全書總目提要』の二つであろう。『甌北詩話』では卷九が丸ごと梅村の評價にあてられているが、その大半は彼のいわゆる「史詩」にみえる史實の穿鑿と、斬榮藩の注『吳詩集覽』に對する批評——それもやはり主として歴史的事實に關するものである——であつて、以後梅村の詩を論ずる者がしばしば陷る歴史偏重という誤りは、このころからすでに一般化していたようである。ただそのはじめの數節で説くところには當を得た説も少なくない。本章の冒頭で引いたくだりが、明白な誤りを含みつつも全體としては確論とみなしうること、先述の通りであ

る。また趙翼は「梅村の古詩は律詩にまさる」と斷言する。後には普遍的となったこの認識がいつにはじまるかは定かではないが、汪琬が既にその「張青瑀詩序」⁽¹⁹⁾で「祭酒吳梅村先生最も歌行を善くす」と言っており、おそらくは梅村生前からこう見る者が多かったのであろう。乾隆年間に至り、この認識はついに固定觀念となる。趙翼の言も、その觀念の支配下にあつて吐かれたものといえよう。この固定觀念の形成にあつて決定的な役割を果たしたのが、『四庫全書總目提要』であつた。

『四庫提要』は紀昀を中心とした人々の手になるものではあるが、自ら吳梅村の第一の愛好者をもつて任じる乾隆帝がその背後にいる以上、その評價には乾隆帝の意向が反映しているとみるべきであろう。『提要』の本文は既に冒頭に引用したが、そのポイントというべきは、梅村の歌行體以外の作品をほとんど無視した上で、「その中歌行一體は尤も擅長せる所、格律は四傑に本づくも情韻は深しとなす。敘述は香山に類するも風華はまされりとなす。韻は宮商にかない、感は頑豔に等しく、一時尤も絶調と稱す」と

いつている點であらう。これはどういうことか。香山——白居易に彼の敘述が類するというのは、兩者がともに長篇七言歌行の形式により物語性の強い内容をうたうことをさすのであろう。白居易の「長恨歌」「琵琶行」と梅村の「永和宮詞」「琵琶行」の間に直接的影響關係が認められることは、竹村則行氏が既に指摘せられた通りである。⁽¹⁹⁾では、「格律は四傑に本づく」とはどういうことなのか。初唐四傑の盧照鄰・駱賓王には確かに「長安古意」「帝京篇」に代表される七言歌行の名作があるが、梅村の歌行はそのいかなる部分に似ているというのか。

ここで考察すべきは白居易と梅村の差違であらう。その最も決定的な違いは典故の多寡にある。梅村がおびただしい量の典故を用いて詩をきらびやかに飾るのに比して、白居易はほとんど典故を用いない。つまり梅村は華麗、白居易は平明であつて、これが兩者の長所とも缺點ともなっているのである。『提要』が四傑をもちだしてきたのは、一つには六朝風の華麗な措辭を用いる盧・駱の歌行と梅村の近似性によるものであらう。『吳詩集覽』七言古詩の部の

冒頭にあげられている袁枚の説も「元白敘事の體を用い、王駱用事の法に擬す」と、同じ趣旨のことをいっている。⁽¹⁵⁾

更に白居易との間に認められる今一つの相違點、つまり白居易が七言歌行において七言以外の句を用いることが比較的少ないのに比し、梅村は隨所で三言句・五言句・九言句等を入してリズムに變化をもたせている點に、やはり長短句をおりまぜることを好む四傑の作を聯想させるともとることができよう。しかし「格律は四傑に本づく」というこの言葉からは、そうした表面的な事象だけではなく、今一つの明清における特徴的な認識を想起する要があるのではなからうか。

明代における四傑の歌行に關する議論として最も名高いのは、何景明「明月篇」⁽¹⁶⁾序にみえるものであらう。そこにはいう。

僕始讀杜子七言詩歌、愛其陳事切實、布辭沈著、鄙心竊效之、以爲長篇聖於子美矣。既而讀漢魏以來歌詩及唐初四子之所爲而反復之、則知漢魏固承三百篇之後、流風猶可徵焉、而四子者雖工富麗、去古遠甚、至其音

節、往往可歌。乃知子美辭固沈著、而調失流轉、雖成一家語、實則詩歌之變體也。……由是觀之、子美之詩、……此其調反在四子下與。

私がはじめて杜甫の七言歌行を讀んだとき、その敘述は切實、その措辭は確固としてゐることを愛してひそかにならおうと思ひ、長篇の詩は杜甫において頂點に達してゐると考えたものであった。ところがその後漢魏以來の歌行と初唐四傑の作をくりかえし讀むに及んで、次のようなことを知った。漢魏はいうまでもなく詩經三百篇のあとをうけたものであるから、その美風はまだ残っている。四傑は巧みに豐麗さを生みだして、古體とは全くかけ離れてゐるように見えるのだが、その音律は、しばしば歌いうるだけのものをもっているのだ。そこではじめて杜甫の詩は無論確固たるものではあるが音樂的な自在さに缺けており、獨自の價值を主張しうるだけのものではあるが、實は詩歌の本道をはずれたスタイルにすぎないのだと悟った。……この點から考えるに、杜甫の詩は……音調においてはむ

しろ四傑より劣るのではあるまいか。

何景明は杜甫の詩を「調に流轉を失う」ものとして批判し、初唐四傑は「往往にして歌う可し」として、杜甫は調においては「反りて四子の下に在り」と斷定している。つまり何景明にとって歌行の最も重要な價值基準は「歌う可き」調子をもっているか否かだったのである。こうした歌謠性重視は、彼らの「眞詩は民間に在り」とする有名な主張、更には復古派における演劇愛好の風とも關聯するものかもしれない。この發想は何景明一人にとどまるものではなく、清初に至って錢謙益の門弟にして反復古派の驍將であった馮班にうけつがれることになる。馮班はその『鈍吟雜錄』において、樂府とは本來うたうためのものであったが、杜甫・元白の新樂府はうたうことのできないものに變質してしまっているとする。この發言は、まことに皮肉なことに何景明・李攀龍の模擬樂府を攻撃するために發せられたものであった。したがって、當然のことながら馮班自身は何氏の影響については何も語っていないが、おそらく兩者の間に直接的影響關係を想定することは誤りではあるまい。

吳梅村研究（後篇）（小松）

更にいえば、王士禛が郎廷槐『詩問』卷一で七古換韻法について問われて、「この法は陳・隋に起り、初唐四傑の輩はこれに沿う。盛唐も王右丞（維）・高常侍（適）・李東川（頴）は尙然り。李杜始めて大いにその格を變う」と答えているのも、この認識と關聯するように思われる。つまり、何景明の説は變形しつつも明清を通じて一種の底流となっているように思われるのである。

この何氏の説と、さきに引いた錢謙益の「梅村先生詩集序」にいう評價——學によって身についた聲律やスタイルに基づきつつ獨自のリズム感をもつ——を考えあわせると、「格律は四傑に本づく」という言葉の意味するところはほぼ明らかとなろう。つまり、梅村の歌行は無論音樂に乗せることを意圖して詠まれたものではないが、しかし「歌う可し」と考えられるような獨自のリズム感をもっていたのである。さきにもふれた長短句を頻用する傾向もその一つであらわれであろう。彼がこうした歌謠性を獲得したについては、後にもふれるようにあるいは彼が戯曲作家であったことも關聯するかもしれない。

七

結局のところ、『提要』の評価が決定的な役割をはたして、以後「梅村體」の概念が定着するに至り、無數の追隨者を生むことになる。しかし、もし假に彼の詩が乾隆帝に愛されることがなかったとしても、やはりその作品は不滅のものとなったであろう。それほど彼の詩は愛されたのである。さながら唐における元白の詩の如く、上は皇帝から下は一般庶民に至るまで、彼の詩を知らぬものはないほどであった。陳圓圓と吳三桂の名は史書よりもむしろ「圓圓曲」⁽¹³⁸⁾によって世に傳えられ、あたかも「長恨歌」における「長恨歌傳」の如く、陸次雲の「圓圓傳」という小説的實録物までが生ずるに至る。彼が「題冒辟疆名姬董白小像」⁽¹³⁹⁾「又題董君畫扇」⁽¹⁴⁰⁾でうたった冒裏の愛妾董白——董小苑——は、「清涼山讚佛詩」⁽¹⁴¹⁾で彼がうたった董鄂妃とおそらくはともに梅村の詩にうたわれているというだけの理由で同一視され、順治帝をもまきこんだ世にも數奇な悲戀物語がそこに形成されて、無數の説唱・演劇を生みだし、現代に至

るもなおこれを題材として小説・映畫がつくられることとなる。その他、下玉京・田貴妃らの名も彼の詩をえてはじめて不滅のものとなり、拙政園を訪れるものは誰もが梅村の「詠拙政園山茶花」⁽¹⁴²⁾を思い浮かべる。彼の詩がいかに人口に膾炙したかは、その演劇に仕組まれたものの多さが證明していよう。『京劇劇目初探』に收める梅村の詩を題材とした劇目は、「玉京道人」「陳圓圓」「山海關」「請清兵」「董小苑」の五種に及ぶ。その多くは清末・民國初の新編であるが、故事が廣く人に知られていたからこそ芝居に仕組まれたことはいうまでもあるまい。

では何故に梅村の詩はかくも愛されたのか。白居易の詩は極めて平明であり、民衆にもうけいれられやすい條件をもっていた。また白居易自身も意圖的に民衆にまで理解できるように詩をつくったといわれる。しかるに梅村の詩はそうではない。典故の過多と、時として用いる當局をばばかり、注を見ながら讀んでもなお意味を理解しがたいことが少なくない。奇妙なことに、この傾向は彼の作品中特に人

口に膾炙したものにおいて最も著しく、「圓圓曲」の結びの部分が何を意味しているかは三百年來議論的となりつつもいまだに明快な解答はえられず、「清涼山讚佛詩」に至っては、ほとんど何をいつているのかわからず、その解釋は謎のまま残されている。こうした性格ゆえに、度を越した深讀みを生ずることにもちがちなものであり、『吳詩集覽』の如きは趙翼から牽強附會のゆえをもつて非難されるに至っているのである。つまり、梅村の詩には一見したところ一般に廣く愛好されるべき要素がないように思われる。たとえ一部インテリの玩弄物とはなりえても、民衆に愛されるには向かないように見えるのである。にもかかわらず、かくも人に愛されたのはなぜか。

その理由について、彼の作品中まず最も世に迎えられたいわゆる「梅村體」の諸作から検討してみたい。「梅村體」とは甚だ漠然とした名稱であつて、その定義は今一つ定めがたいが、狹義には七言歌行、廣義には五言をも含んだ歌行すべてと一部の歌行體以外の長篇古詩をいうようである。ここでは廣義に解釋して、五言・七言の長篇古詩でその内

容にある種の物語性を有するものについて検討していくこととする。

「梅村體」の最大の特徴はその内容にある。そこでうたわれているのは同時代もしくは極めて近い過去におこつた實際の、それも極めて著名な事件である。「圓圓曲」における清の北京攻略、「永和宮詞」⁽¹⁵⁾における田貴妃の盛衰、「雁門尙書行」⁽¹⁶⁾における孫傳庭の敗死等、いずれも近事であり、かつ歴史を左右するような大事である。當時の人々は直接・間接にこうした事件の影響を被り、その部分的な事態の進行を直接目睹していた。自然そこにうたわれる内容は人をひきつける力をもち、事件の詳細を知らない人々はその眞實を知ろうとし、事件に直接関わった人々も自分の體驗した事柄が詩人の筆によっていかに美しく脚色されて語られるかを知らうとする。しかもその語り手はともあれ政府の中樞に近いところにいた人間であり、しかも史官をもつて自認する梅村は、時にはそのうたう内容が眞實であることを保證する證人の名を記し⁽¹⁶⁾、時には當事者が自ら語るといふ設定のもとに詩をつくるため⁽¹⁶⁾、讀者はその信賴

性にほとんど疑問をはさもうとしない。これが彼の詩が一般大衆にまで廣く愛され、また「詩史」の名のもとに重視された理由の一つである。この點については趙翼もつとに指摘している。

梅村身閑鼎革、其所詠多有關於時事之大者。……事本易傳、則詩亦易傳。梅村一眼覷定、遂用全力結撰此數十篇、爲不朽計。此詩人慧眼、善於取題處。白香山長恨歌、元微之連昌宮詞、韓昌黎元和聖德詩、同此意也。

梅村は自身明清交替の過程を目撃しており、そのうたう内容には時事の中でも大きなものに關わることが多い。……事件自體が元來世に傳わりやすいものなのだから、それをうたった詩も傳わりやすいということになる。梅村はこの點に目をつけると、全力をあげてこの數十篇の作品をかきあげて、己が名を不朽のものとするための策とした。これは詩人の慧眼というべきであつて、題材のえらび方がうまいのである。白香山の「長恨歌」、元微之（稹）の「連昌宮詞」、韓昌黎（愈）

の「元和聖德詩」も同様の作である。

つまり趙翼にいわせると、梅村は世に伝えられるであろう題材を意圖的に選んだのであり、そこが彼の目端のきくところだというわけである。梅村がこれらの作品をつくったのは、別におのれの中なる藝術的衝動につき動かされてというわけではなく、單に自分の作品を世に廣めたいがためであつたように思われる。『北游錄』によると、談遷は「蕭史青門曲」「臨淮老妓行」「王郎曲」ができあがるたびに見せてもらい、成立の事情について説明をうけ、全文を抄寫している。要するに梅村は、これら諸作を談遷が廣めてくれることを期待したのであらう。彼の詩が非常な速度で傳播していったことは顧湄の「行狀」にも説くところである。時事的な題材は、この場合最も有效な加速劑であつた。しかもこうした時事的な題材をとりあげることは、中國における長い詩の歴史の中でも前例の少ない試みだったのである。

一體に中國は敘事詩の傳統に乏しい國である。近年中國では『詩經』や『樂府』、更には杜甫以下の詩人たちの作

品の中の社會詩的なものを取りあげて、これに「敘事詩」の名を冠しようとする傾向がある。⁽¹⁶⁾社會詩は、たしかに事實・事件をうたうという點では「敘事詩」といいうるかもしれないが、しかし「敘事詩」を西歐でいうエピックの譯語とする通常の規定に従えば、これらはその名稱にはふさわしくない。同様、「孔雀東南飛」等の物語詩も、極めて小市民的な内容を扱うという點で、「敘事詩」の枠内には収まりにくい。唐代白居易の「長恨歌」の如きは敘事詩といいうる内容をもつが、その敘述は梅村の詩の如く直接的ではなく、また後半道士が登場するあたりは非常に浪漫的であつて、梅村が徹頭徹尾事實に即して敘述を展開するのは異なる。結局のところ、梅村のこうした敘事詩的作品は、ほとんど前例のない新分野を開拓するものだったのである。では彼は何故にかかる革新をなしとげることができたのであろうか。この問題を解くカギは、當時の俗文學界の風潮にある。

傳統文學の世界では充分に發展しえなかつた敘事文學は、かわつて俗文學にその擔い手を見出す。民間樂府における

物語詩はその初期の一例であらうし、その後唐代變文や宋代說話・講史において、相互の間の關聯性は甚だ曖昧模糊として定かではないものの、ともあれ物語性の強い民間文學は相繼いであらわれ、更に元代に入つて演劇的な方向に進んで元雜劇を生むに及んで、かつて中國において文學の表層に現われることのなかつたフィクションの文學が、はじめて確固たる様式をもつて成立するに至る。これは同時に敘事文學の成立をも意味するものであつた。從來歴史書にその地位を獨占され、せいぜいが歴史書の變形から生まれた傳奇小説という小さな分野しか持ちえなかつた敘事文學が、ここにはじめて己れの地位を主張すべき場を得たのである。ただ留意しておかねばならないのは、たとえ元雜劇の作者の中に何人かの士大夫がまじっていたとしても、その擔い手は常に民衆であつたことである。

明代に入つてこの情況に變化が生じる。俗文學——特に崑山腔系戲曲作家の階層が士大夫へと移行し、それに伴つて俗文學の地位自體も——かつてもつていた潑刺たる生氣を代償として——向上する。それと同時に題材面において

も新しい傾向が現われてくる。即ち、おこったばかりの事件を芝居や小説に仕組んで際物的効果をねらう作品群が生じてくるのである。その最も早くかつ最も顯著な例は『鳴鳳記』であろう。この戯曲は嚴嵩・嚴世蕃父子に對する楊繼盛以下の人々の苛烈な闘争を描いた作品であるが、その成立は嚴氏父子の失脚直後とされる。そしてその作者に擬せられるのが王世貞であつた。焦循の『劇說』卷二にはいう。

相傳鳴鳳傳奇、弇州門人作、惟法場一折是弇州自填。詞初成時、命優人演之、邀縣令同觀、令變色起謝、欲亟去。弇州徐出邸抄示之曰、嵩父子已敗矣。乃終宴。

うわさによると『鳴鳳記』傳奇は弇州（王世貞）の門人の作だが、「法場」の一場だけは弇州自身の手になるという。この芝居が完成した時のこと、役者に命じてこれを上演させ、縣令を招いて一緒に見た。縣令は顔色を變えてたちあがり、急いで立ち去ろうとした。すると弇州はおもむろに官報をとりだし、縣令に示して言った。「嵩親子はもう失脚しましたよ。」そして宴

會をおわりまでつづけたということだ。

あまりにも小説的にすぎて到底信じがたい話であるが、この逸話の眞偽のほどはこの際問題ではない。重要なのは『鳴鳳記』がこうした逸話を生むべき性格をもっていたこと、そして當時の社會にこの逸話を受け容れるだけの素地があつたということである。『鳴鳳記』は政治的際物芝居であり、それゆえに世の歡迎をうけたのである。これは扱う内容は全く異なるが、恰度近松門左衛門の淨瑠璃が最新の戀愛事件を次々と劇化していったのと同様のねらいをもつものといえよう。周知の事件であればあるだけ、當りも大きいのである。

『鳴鳳記』の成功が呼び水となつたのであろうか、明末清初にはこの種の小説戯曲が甚だ多い。例えば魏忠賢が失脚するや、たちまちの中に『檣杌閑評』以下數種の魏忠賢(16)もの小説が出版されているが如きは、その小説における好例である。戯曲においても、梅村が序を書いた李玉の『清忠譜』の如きは近過去の著名な事件——魏忠賢による東林彈壓とこれに反抗しておこつた蘇州の市民暴動——を扱っ

たものであり、李玉にはこの他にも『萬民安』の如き同工の暴動ものや、嚴嵩・嚴世蕃と王忬・王世貞・戚繼光の争いをモデルとした『一捧雪』の作がある。また同じく梅村の友人であった袁于令には『清忠譜』と同じ題材を扱った『瑞玉記』の例があり、『劇説』卷三によると、劇中で諉られた毛一鷺が賄賂をおくって自分の名を改めることを求めたため、袁于令はその名を「春鋤」（鷺の雅名）とかえたという。更に李玉と同じ蘇州派に属する邱園には梅村の親友吳繼善が成都で殉難したことを扱った『蜀鵲啼』の作があり、梅村はこの實演に接して四首の七律を詠んでいる⁽¹⁶⁸⁾⁽¹⁶⁹⁾。

自身著名な劇作家でもあった梅村が、こうした友人たちの劇作に無關心であつたはずはない。しかも、眞偽のほどは知らず『鳴鳳記』の作者に擬せられる王世貞は、梅村にとっては尊敬おくあたわざる先輩である。梅村がその摸倣を詩の分野で企てたとしても不思議はあるまい。このことを證するのは、彼とほぼ同時代の人々が彼の詩に對して示している態度であろう。鄧之誠『清詩紀事初編』⁽¹⁷⁰⁾によると、錢陸燦は「蕭史青門曲」の「自家兄妹話酸辛」の句を指し

吳梅村研究（後篇）（小松）

て「盲女の彈詞に付す可し」というという。また本格的實錄物歴史劇の總決算ともいふべき『桃花扇』の結び、續四十齣「餘韻」で柳敬亭が「盲女の彈詞せるに照いて唱う介」⁽¹⁷¹⁾でその名も「秣陵秋」の調子で明の亡國をうたい、老贊禮が「彈詞とはいえ、吳梅村の一篇の長歌によく似ている」というくだりがある。これは、梅村が「楚兩生行」でうたった柳敬亭・蘇崑生や先述の卞玉京を劇中で活躍させていることとともに、孔尚任の梅村に對するオマージュと解することができよう。ともあれ錢孔兩人はともに梅村の長歌を「盲女の彈詞」にたとえる。更に、やや遅れて鄭方坤は「李龜年の開元天寶遺事を説くが如し」⁽¹⁷²⁾と評するが、これも李龜年が洪昇の『長生殿』第三十八齣「彈詞」の一段の主役であることを考えあわせると、右の兩人の説と同じ性格をもつ評價とみなすことができよう。彈詞は原則として七言句により構成されるものであり、梅村の七言歌行はその形式からいっても恰度一致しているわけであるが、この評價はそれ以上に、その内容・スタイルが彈詞を含めた俗文學一般に近いことを意味しているものであろう。

事實彼がその長篇古詩で用いる手法は甚だ演劇的・小説的である。この點については趙翼がすでに指摘している。

梅村古詩勝於律詩、而古詩擅長處、尤妙在轉韻。一轉韻、則通首筋脈、倍覺靈活。

梅村の古詩は律詩にまさる。そして古詩の最もすぐれた點は、換韻において極まるといえよう。一たび換韻するや、全體を貫くすじが、にわかに生き生きとしたものとなるのである。

そして以下數例をあげているが、試みにその一例を示せば、「雁門尙書行」で孫傳庭一門が殉難した後、幼兒一人だけが免れたことをうたって、

忽云、回首潼關廢壘高、知公於此葬蓬蒿、益覺迴顧蒼茫。

突然こういう、「首をめぐらせてみれば潼關に崩れた城壁が高くそびえる。公はこの草深き中に葬られておわすのだ。」はるかかなたをふりかえるような感覚がいやますのを感じることになる。

つまり急激な舞臺轉換によりドラマティックな効果をあげ

ているのである。これがすぐれて演劇的な手法であることはいうまでもあるまい。早い話が、さきに引用した『桃花扇』『餘韻』の如きはその好例であらう。

またこうした傾向は詩の冒頭においてもしばしば看取される。例えば、最初に一人の語り手を登場させて全體をある枠組の中で語る形態は、唐代傳奇において既に常用されていた手法であると同時に、語り部という形で小説の原初形態ともつながり、古くは古樂府、近くは講談師・彈詞の盲女とも相通じるいきかたといえよう。その典型的な例は、「吳門遇劉雪舫」の冒頭であらう。

出門遇高會 外出して宴會に出くわした
雜坐皆良朋 まじりあって坐っているのはみな親しい友

排闥一少年 戸を開けたのは一人の若者
其氣爲幽并 北方游俠の氣風あり
羌裘雖裹膝 えびすのかわごろもを身にまといは
いるが

目適無諸僮 實は北人どもなど眼中にない

忽然笑語合 急に意氣投合してしまい
與我談生平 私に身の上を語ってくれた

こうしてこの若者が世にも數奇な自らの過去を語るとい
形で物語が進行する。時には作者自身が語り手となること
もある。「閬州行」。

四座且勿喧⁽¹⁷⁾ 皆さんちよっとお靜かに
聽我歌閬州 私が閬州のうたを歌うのをお聴き下さ

い

閬州天下勝 閬州は天下の勝

十二錦屏樓 十二の錦屏樓がそびえる

歌舞巴渝盛 この巴渝の地では歌舞が盛ん

江山士女游 人々は男女つれだつて山水に遊ぶ

我有同年翁 私には同年の友があり

閬中舊鄉縣 閬州はそのふるさと

以下作者が運命に弄ばれる夫婦の物語を語っていくのであ
る。これは明らかに語り物の手法に基くものである。七
言歌行においては、こうした手法は五言におけるほど目立
ちはしないが、冒頭に鮮かな印象を與える句をおいて状況

設定をすることが多い。その効果は極めて演劇的である。
たとえばさきの「雁門尚書行」の出だし。

雁門尚書受專征 雁門尚書は司令官の命をうけ

登壇顧盼三軍驚 將壇に登つてあたりをみまわせば

全軍は驚く

身長八尺左右射 みのたけ八尺、左右に矢をとばし

坐上咄吒風雲生 席上で叱吒すれば風雲も生ぜんば

かり

このように主人公の風貌を「三軍」の視點にたつてあつか
も役者の如く視覺的に描きだすのである。

また趙翼は彼の詩の缺點として「ただ用韻ははなはだ泛
濫、往往にして上下平を通押す」といい、また『清詩紀事
初編』には「このんで口語を用うるはまたこれ一蔽なり」
というが、この二點はいずれも戯曲においては一般的に許
容されている事柄である。これもまた、彼の詩と俗文學と
の關聯を物語るものかもしれない。

このように考えてみれば、『桃花扇』の如きは梅村の長
詩の直系の子孫ともみなしうるものであり、孔尚任が特に

梅村の名をあげることも理解できるのである。梅村がこうした作品を生み出したのは、彼が幼少の折から演劇に常時接觸しうる環境に生まれ育ち、自らも戯曲作家となったことによるところが大きいといえよう。

そしてこの特性こそが梅村の史詩が人々に愛された主たる要因であった。大衆の好む題材を用い、口ずさむに快い調子を用いて書かれている以上、もはやその典故多用ゆえの難解さは問題ではない。むしろ多くの戯曲の曲の部分や、講史の「只見」の語をもつてはじまる語りの部分の如く、聞いて耳に快く、読んで目に華やかなその詩句を、大衆は理解する必要のないものとして聞きながし、読みながしていたのではなからうか。例えば湯顯祖の諸作の如きは、甚だ人口に膾炙し、今日なお上演されることのある芝居でありながら、その曲辭は甚だ華麗、更に白までも駢文化した部分もあり、舞臺にかけても聞いてすぐ理解できると思えない。にもかかわらず観客はこの芝居を愛した。つまり、世には理解を必要としない種類の文藝も存在するのである。

他方、清朝特有の著しくペダンティックな文人たちにとっては、梅村の詩はその典故過多の難解な表現ゆえにかえって愛好すべきものとなる。清朝の詩人が一般に自分の學識を誇示したがる傾向にあることは周知の通りである。こうした學問自慢の人々にとっては、梅村の詩にふくまれているおびただしい量の典故を發見し、その中に隠されている史實や微意を掘りおこすことは、自らのプライドを満足させるに足る甚だ楽しい作業であつたに違いない。その行きつくところは、斬榮藩の『吳詩集覽』の如き驚くべき煩瑣な注釋となり、また趙翼のようにその一條一條に文句をつける態度となつて、もはやとどまるところを知らない。

更に、梅村の詩が多くの追隨者を生んだのも、そのスタイルに由來するものであろう。梅村の詩は、錢謙益の言葉を借りれば、「學ぶ可くして能くす可からざる」ものである。これは裏返していえば、梅村がその天才ゆえに達した究極の一點を除けば、そのスタイルを模倣するだけで一應形の整った詩をつくることができるということを意味する。まして典故を多用することは清朝人の得意技である以

上、「梅村體」の名のもとに典故を濫用した敘事詩が無數につくられたのも當然のことであつた。乾隆帝が梅村の詩に心をひかれたのも、一つには彼が書において董其昌を好んだのと同様、模倣にむいた作風であつたからかもしれない。

八

以上いづゆる「梅村體」の諸作を中心に、彼の詩が歡迎された理由について考えてみた。では「梅村體」以外の作品はどのようにみなすべきか。

一口に「梅村體」以外の作といつても、その内容・形式は極めて多岐にわたる以上、十把一からげにここで論じてしまうわけにはいくまい。彼の「梅村體」以外の詩を内容によって大まかに分類すると次のようになる。

- 一、贈答の作。
- 二、自述の作。
- 三、社會詩。
- 四、自然詩。

吳梅村研究（後篇）（小松）

五、美術關係の詩（主に題畫詩）。

六、詠史の類。

七、詠物詩。

八、豔詩。

九、その他。

更にその形式は、五古・七古・五律・七律・五言排律・五絶・六絶・七絶と一應すべての詩型を用いてはいるものの、この中六絶が少ないのは當然としても、五絶もわずか三十五首、しかもその中二十四首は「子夜詞」「子夜歌」であり、また七絶は百三十二首あるものの、その大半は題畫・詠史・妓女への贈答を多く含む豔詩であり、要するに皆輕い即興の作であつて、本格的な作品は清朝の命に應じて出仕する途上でつくつた數首の作にほとんど限られる。つまるところ梅村は長篇を得意とするのに反比例して、短い詩型は不得手であつたらしい。

これらの作品においては、無論題材や詩型によって少しずつスタイルが異なるものの、ともあれ全體に「梅村體」諸作の如き獨自の表現を確立しているとはいひがたいこと

は間違いない。つまり世に梅村の詩の特徴としてあげられる事柄の多くは「梅村體」諸作にのみあてはまるものなのである。例えば通常梅村の最大の特徴としてあげられる典故の多用は、確かに「梅村體」の作品においてはその作風を特色づけるに足る要素であり、かつ極めて效果的に機能してもいるわけであるが、その他の作品においては必ずしもそうではない。特に彼の贈答の作においては、典故はむしろ手拔きの手段として用いられている感がある。例えば「送無錫堵伊令之官歷城」⁽¹⁷⁾。

攬轡朱輪起壯圖

朱色の車輪の車に乗りたづなをと
って壯大な計畫に着手すれば

遺民喜得管夷吾

遺民たちは管仲の如きお役人が見
えたとして喜ぼう

城荒戸少三男子

町は荒れはて、三人の男子がいる
ような家は少ないが

名重人看五大夫

君の名は重んぜられ、人は五大夫
なみに見なそう

畫就煙雲連泰岱

君は雲が泰山にかかるさまを畫に

詩成書札滿江湖

えがき

詩をこしらえればそれをしるした
手紙が天下に滿ちよう(?)

茶經水傳平生事

君は日頃からお茶や水にうるさい
が

第二泉如趵突無

天下第二泉とて趵突泉には及ぶま
い

「管夷吾」は春秋齊の宰相管仲のこと。「三男子」は齊の都臨淄に關する典故をふまえる。「五大夫」は秦の官職名たると同時に、泰山にある五大夫松をも意識していよう。

「泰岱」は無論泰山のこと。「第一泉」は無錫、「趵突」は濟南にそれぞれある名泉。つまり『吳詩集覽』に「三四は工妙、以て歷城より情を生ぜるなり。結は別趣あり、以て兼ねて無錫を點ずるなり」というように、全篇ことごとく相手の赴任地山東と出身地無錫に關する典故と地名のみを用いてねりあげた作品で、いかにも「工妙」ではあるが、まったく型にはまっており、讀者を感動させる力には缺ける。この他、贈答の作には、相手の行先の地名とその地に

まつわる典故、あるいは相手と同姓の古人といったものを持ちだしてきて適當にこしらえた、出来合いの作が多いのである。

しかし同じ贈答の作でも身内や親密な友人に贈った詩ははるかに眞情あふれるものとなっている。例えば實弟偉光におくった「病中別孚令弟」十首から第四首⁽¹⁶⁾。

消息憑誰寄 誰に託して便りを出したのか

羈愁祇自哀 思いつかぬまま愁いにとらわれてひとり哀しんでいたが

逾時游子信 時をへて旅にある私のたよりが

到日老人開 届いた日父上は開かれよう

久病吾猶在 長い病にふせりつつもまだ私は生きて

おり

長途汝却回 長い道のりをお前は歸りゆく

白頭驚起問 白髮頭の父上は驚きたちあがって

新喜出京來 よいしらせが都から來たことをきかれ

よう

あるいは親友穆雲桂におくった「送穆苑先南還」四首⁽¹⁷⁾の第

一首。

遍欲商身計

いろいろな相手と身のふり方を相談しようとしたが

相逢話始眞

君と會えてはじめて眞剣に話すことができた

幸留殘歲伴

晩年の仲間が残ってくれると喜んでいたのに

忍作獨歸人

つれなくも一人歸っていつてしまうとは

年逼愁中老

歲月がわが身にせまり來り、愁いの中に年老いてゆく

家安夢裏貧

安らかな故郷のわが家を思い、貧しくとも楽しいそのくらしを夢にみる毎日

だ

與君謀共隱

君とともに隱遁することとしたい

爲報故園春

故郷の春のたよりをしらせてくれ

いずれも平明な表現の中に深い感情がこめられている。この差はどこから生ずるのか。

兩者の間に認められる最も明確な差違は、典故の多寡である。一體に梅村が典故を多用する場合は三つに大別することができよう。即ち、(一)華麗な効果をねらう。(二)言わんとするところを曖昧にする。(三)典故をくみあわせて出来合いの作をつくる。この三者である。(一)のケースは「梅村體」諸作と一部の豔詩に、(二)のケースは一部の「梅村體」と詠史・讀史の諸作に、(三)のケースはさきにも示したようなあまり親密でない人物に對する贈答の作において認められる。一般に典故を多用した詩は、受容者側にとっては甚だ難解なものであるが、(二)のケースのように特に凝った用い方をせねばならない場合を別にすれば、通り一遍のパターンに自分の知っている故事をくみこむだけで詩が成立するわけであるから、熟練者にとってはむしろ平明な詩よりつくりやすいといえるのではなからうか。『吳詩集覽』はさながら作詩の教科書のように梅村の用典の法を説明しているが、あるいはこれが『集覽』が世に迎えられた原因の一つなのかもしれない。

梅村がその眞情を吐露した作品ではあまり典故を用いな

いという傾向は、贈答の詩のみならず、彼が自分自身のためにつくった自述的——もしくは私小説的——な詩においても、よりはっきりと認められる。例えば「哭亡女」三首⁽¹⁷⁸⁾の三。

扶病常聞亂

(娘は)病をがまんしながらいつも亂のうわさを耳にしていた

漂零實可憂

零落したこの身がまことにうれわしい危険がせまれば親子ともにはたすかれ

危時難共濟

そうもないのだから若死したほうがかえっていいのかもしれない

短算亦良謀

最後のわかれのときしきりと私の手をとろうとしたが

訣絕頻攜手

いたましいことにすこし頭をもたげるのがやっとであった。

傷心但舉頭

娘は(最期の迫った)ゆうべになって

昨宵還勸我

もまだ私をなだめてこう言ったのだ

不必淚長流

あまりなげいて下さいますなど

通常梅村の名から人が思いうかべるものとは程遠い、平明にして凝縮した表現である。典故をふまえた表現も皆無ではないが、内容を理解するには何らの説明を要さない。つまり吳梅村は、内容によってスタイルをかえてしまうタイプの詩人であった。

その詩の宗とするところは、再三述べてきたように出發點においては復古派的なもの——盛唐詩、特に李杜——に若干の復社的修正を加えたもの、具體的には白居易や六朝の詩風をまじえたものであったはずである。そして彼自身の意識としては、前章でみたように最晩年に至るまで復古派の後繼者をもって自認し續けていたわけであるが、實際には年を経るに従って、その作風は彼自身の意識を裏切りはじめ、彼の晩年における作品のいくつかが宋元詩の境地に近づいていることは明らかである。このことを端的に示すのが「許九日顧伊人元人齋中雜詠詩に和して成り、持して示す。戯れてその體にならう」⁽¹⁷⁹⁾であろう。この詩ははっきりと題名にも明示されているように元人——楊載——の詩に「戯れて」和したものである。「戯れて」自分の主

義とは本來異なるはずの傾向にある作品にならうというのは、かつての王世貞における白居易にその例が見出されるが、⁽¹⁸⁰⁾梅村も王氏の場合と同様、自身の意識の底にある抵抗に、自身で納得をいかせるために、こういう言い方をしたのではなからうか。實際には梅村は同タイプの詩を他にも多数作っているのである。この八首からなる連作は、いずれも詠物詩の體裁をとり、それも「焦桐」^{ムシクイ}「殘畫」^{ムシクイ}「舊劍」^{ムシクイ}「破硯」^{ムシクイ}「廢檠」^{ムシクイ}「塵鏡」^{ムシクイ}「斷碑」という、いずれも「齋中」にかかわるこわれたもの、役にたたなくなってしまうもののばかりをとりあげている。こうした奇妙な題材を好んでとりあげるのが宋元詩の一特徴であることはいうまでもあるまい。そしてこれに類した作品は、梅村の集中に他にも多数見出される。例えばより早い時期、在京時代の作と思われる十首からなる詠物詩連作はラクダや象、ザクロや文官果を扱うが、これらはやはり從來扱われたことのない題材であろう。また晩年の作とおぼしき「楊」⁽¹⁸¹⁾以下八首の連作も、「贈殘（魚の名）」⁽¹⁸²⁾「燕窩」^サの如き珍奇なものをつたい、またその作風甚だ諧謔味に富んで彼の一般の

イメージに似ない。更に『家藏稿』卷十六に收める「爾虎」「茄牛」以下八首の連作の如きは、題材の奇異さもここに極まったかの感がある。

また彼の自然詩にも——やはり多くは晩年の作だが——宋元の詩風に近づいたものが多いように思われる。例えば彼の自然詩中最長の作である「廿五日偕穆苑先・孫統心・葉予聞・允文游石公山・盤龍・石梁・寂光・歸雲諸勝」⁽⁴⁸⁾は、

大道無端倪 大道は凡人には推し測りがたいもの
眞宰有融結 造物主は山川を形づくられた
或人而拘瘦 或るものは人ながらにしてせむしであ
り

或馬而蹄齧 或るものは馬ながらにして猛り狂う
或負藏壑舟 或るものは谷に隠してあつた舟を背負
うかのよう

或截專車節 或るものは車一杯の大きさの骨をたち
切ったかのよう
或象神鼎鑄 或るものは大きな鼎をこしらえたかの

如く
或類昆吾切 或るものは昆吾の名劍に斷ち切られた
のに似る

というが如きは、韓愈にはじまり宋詩にうけつがれた執拗な描寫の一例をみるようである。その他、晩年の作品には甚だ理窟ばいものが多い。ただ彼の表現がいかに宋詩に近づいたところで、吉川幸次郎博士がかつて宋詩の最大の特徴としてあげられた「悲哀の止揚」とは、吳梅村はおそらく宋以降の詩人の中で最も縁遠い詩風をもつことは間違いない。彼の詩精神は、やはり六朝・唐の詩人たちに近いものであった。

以上、「梅村體」以外の作品の特徴をいくつか取り出して論じてきたわけであるが、最後に彼の詩の中で「梅村體」諸作と並んで最も愛好された分野——自らの變節についてうたった作品群について論じてみたい。

梅村の變節は極めて同情的な目で見られるのが常であり、かつその後悔の念をうたった諸作は彼の作品中でも特に高く評價され、世からも歡迎されている。例えば趙翼はこう

いう。

梅村出處之際、固不無可議、然且顧惜身名、自慙自悔、究是本心不昧。以視夫身仕興朝、彈冠相慶者、固不同、比之自諱失節、反託於遺民故老者、更不可同年語矣。如赴召北行、過淮陰云、我是淮南舊雞犬、不隨仙去落人間。……至今讀者猶爲悽愴傷懷。

梅村の出處進退には、無論文句をつける餘地がないわけではないが、とはいふものの、己れの名を汚したことを惜しみ、ひとり恥じ、後悔したのだから、結局のところその本心にはうしろ暗いところはないといえよう。これをあの清朝に仕えて、出世できることを喜びあつた連中と比べれば、無論大違いであるし、自分が節を失つたことをごまかそうとして、遺民故老と稱した人間とは、なおさら同列に論ずることはできない。そのお召しに應じて北行し、淮陰を通つた折「私は淮南王がかつて飼つておられた雞や犬のようなもの、ご主人様の昇天についていくことができず人の世に落ちこちてしまった」というが如きは、……今でもこれを

吳梅村研究（後篇）（小松）

讀む者はやはりいたましく悲しい思いを禁じえないのである。

要するに梅村の變節はやむをえざるものであり、また後になつて悔いたのだから他の者とは一緒にならないものである。ここで「彈冠相慶者」というのは龔鼎孳らを、「反託於遺民故老者」というのは錢謙益をさすものであることはいうまでもあるまい。同じ貳臣でも彼らと梅村とは異なるというのが趙翼の認識であり、かつ當時の人々の代表的な見解でもあつた。なぜこのような評價の差が生じたのか。それは他でもない、梅村は後悔の念を書きつづつた大量の詩を残したが、龔鼎孳や錢謙益は亡國の哀しみをうたうことはあつても、自らの變節については黙して語ろうとしなかったからである。

では何故に梅村のこの種の作品が深く世に迎えられたのか。本來清朝に仕えたことを悔いた詩である以上、清朝側の支配者にとっては甚だ不快なものでなければならぬはずであろう。しかるに乾隆帝は——一言をもつて錢謙益の全存在を抹殺したこの獨裁者は、梅村の詩を熱愛し、『吳

『詩集覽』のために御製の詩を與えてさえている。これは何故か。そこに梅村の詩の本質をとくカギがありそうである。

變節が吳梅村にとって一大痛恨事であったことには、疑問の餘地がない。さきにもみたように、彼は再三にわたって推薦を辭退しようとしながらも、ずるずると流されていったのである。この時期の彼の作品の中には、例えば「雪夜苑先齋中飲博達旦」の⁽¹⁸⁾ように、ほとんど自暴自棄めいたものすらある。二首の第二首。

相逢縱博且開顏

せっかく會つたのだから思いきり博打をうってともかく笑おうではないか

興極歡呼不肯還

興極まれば歡呼の聲あげ歸ることなど承知はせぬぞ

別緒幾年當此夜

いくとせかの別れの思いを今夜にぶつければ

狂名明日滿人間

明日には氣が狂つたという評價が世間に滿ちよう

松窗燭影花前酒

松のさしかかる窓にともしびの光

草閣雞聲雪裏山

さす中花の前に酒をくみ雪におおわれた山の中、みすばら

殘臘豈妨吾作樂

しい家に雞の聲がひびく歳のくれとてかまひはせぬぞ

儘教遊戲一生閑

ままよ一生遊んでややろう

第一首では本來下戸である彼が、「痛飲不甘辭久病——長わずらいの身とて酒をこわりはせぬ」とうたい、はては「狂名」を世にばらまこうというに至っているのだから相當なものである。彼のやり場のない焦燥と苦しみがここによく表現されているといえよう。しかし彼は顧炎武の如く死を賭してまで出仕を拒み通そうとはしない。この時期彼が出仕をためらわざるをえなかったのは、彼自身の良心の問題以外に今一つ、周囲からの壓力も關係していた。梅村が江南社事の中心人物である以上、彼の出仕はもはや彼個人の敗北にはとどまらないものとなっていたのである。『清詩紀事初編』に「その行を阻む者甚だ多し」というのは、この間の事情をさしているであろう。結局彼が自身と周囲とに對する口實として持ち出して來たのは、兩

親の言葉であつた。顧涓の「行狀」には、兩親に説得されて「老人の意を傷つけ難く、乃ち病を扶けて郢に入る」といい、程穆衡は『婁東耆舊傳』で、「その晩節を譏る者は、命の嚴親に出で、志は宗緒の跡を全うするに在りしを知らざるなり」というが、無論眞實拒絶する覺悟をしていれば、兩親の意見がどうあれそれを貫いたに違いない。常に他者からの影響に左右されてきた梅村は、ここでもまた流されていくのである。

彼の上京が眞實氣の進まぬものであつたことは、その遅運とした足取りと、途上でつくられた多くの詩の内容からも明らかであろう。さきに趙翼がひいた「我是淮王舊雞犬、不隨仙去落人間」の句もこの途上つくられたものである。⁽¹⁸⁾都を目前にしてもなお彼の優柔不斷さはかわることなく歸郷を思いつづけ、「將至京師寄當事諸老」四首の第四首では

平生蹤跡儘繇天
世事浮名總棄捐

常日頃の行動はお天道様まかせ
俗事やつまらない名聲は全部棄て
さつたつもりでおりました

吳梅村研究（後篇）（小松）

不召豈能逃聖代

わざわざ召し出されずともこの御

代を逃れられるはずもないのですし

無官敢即傲高眠

無官の身となつたところですぐに

隠者ぶつてえらそうに高いびきかいたりはいたしません

匹夫志在何難奪

こんなつまらぬ人間でも志はもつております。それを奪うことは何

とむずかしいことでしょう

君相思深自見憐

皇帝陛下や大臣の方々はあわれと思つて下さるはずで

す

記送鐵崖詩句好

楊維禎を無理に仕えさせようとは

せず故郷に歸らせた折の宋濂のすばらしい送別の句をおぼえており

ます

白衣宣至白衣還

「白衣（無官）にて召しよせられ

白衣にて歸る」と

ほとんど卑屈なまでの哀願をくりかえしているが、ついに

許されることはなかった。かくて彼は二年半の在京生活の後、歸郷する。この間別に龔鼎孳らの政治鬭争にも、錢謙益らのレジスタンスにも、積極的に参加した形跡はない。ただこれ以後、彼は多數の自らの變節を歎く詩をつくり、それが世に愛好されるに至っているのである。

では梅村は何のために自らの變節をわざわざ詩の形にして世に廣めたのか。これが一つの問題である。この問題を説明するためには、この種の作品の文學的特質について考察を加える必要がある。

變節以後の梅村の作品は、典型的な轉向文學の様相を呈する。無論轉向文學にも種々あり、中には徹底的な轉向をとげて體制側の論客に收まってしまうケースすら存在するが、一般には、私小説の形式を用いて縷々と自身が轉向するに至った苦しみと悲しみを、後悔の念をこめてかきくどいていくのが通常であろう。梅村の作品はまさにこの條件に合致する。要するにここのうたわれている内容は、自責の形をとった泣き言である。その典型的な作例として有名な「⁽¹⁸⁷⁾自歎」をあげよう。

誤盡平生是一官

棄家容易變名難

松筠敢厭風霜苦

魚鳥猶思天地寬

鼓枻有心逃甫里

推車何事出長干

旁人休笑陶弘景
神武當年早挂冠

わが一生をことごとく臺無しにしたのは一つの官位

家を棄てて出家するのはたやすいことだが、名を變えて身を隠すのは難しい

松や竹の如きこの身は風霜の如き苦しみをいとはせぬつもりだった

魚鳥でさえひろい天地を思うのに（なぜ私だけは自由になれないのか）

舟に乗りかじをたたいて隠退してしまいたいとは思うが

なぜか車に乗って出てきてしまった

どうかこの陶弘景めを笑い給うな
私だって昔は弘景同様神武門に冠をかけて歸ったこともあるのだから

「棄家容易變名難」としてしかたがなかったやむをえなかったということ強調しようとする。これは要するに自己辯護であり、泣き言であらう。

それゆえ當然のこととして、この種の作品を非難する人間もある。『吳詩談藪』末尾には、あたかも全篇の結びの如くに次のような言葉が記されている。

乙未夏、同年平陸荆如棠蔭南覆書云、……循覽吳詩、至上房師周芮公、弔侯朝宗諸作、輒掩卷不欲卒讀。梅村當勝國時、身負重名、位居清顯。當改玉改步之際、縱不能與黃蘊生・陳臥子諸公致命遂志、若隱身岩谷、絶口不道世事、亦無不可。乃委蛇好爵、永貽口實、雖病中口占有一錢不值之語、悔之晚矣。

乙未（乾隆四十年）夏、私（靳榮藩）の同年平陸の荆如棠蔭南が返書をよこしているには、「……吳梅村の集を一わたり見ていって、『房師周芮公に上る』⁽¹⁸⁾『侯朝宗を弔う』⁽¹⁹⁾等の諸作までくると、いつも本をとじてしまひ、最後まで読み終える氣はなくなる。梅村は明朝の

吳梅村研究（後篇）（小松）

當時、名聲をにない、高い地位にあった。それゆえ鼎革にあたって、たとえ黃蘊生（淳耀。嘉定で清軍に敗れて自殺。梅村の友人であった）・陳臥子（子龍）ら諸公とともに生命をすてて、志をとげることができなくとも、山中に隠遁して俗事を口にしないようにすることはできたはずだ。なのに身を屈してまで爵位を好み、永遠に惡名を残してしまった。病中につくった即興の作に『一錢にも値らず』という語があるが（賀新郎）「病中有感」の一句）、今さら後悔してももう遅いのである。」感傷的な詩によって自らの失節を粉飾しようとする者に對して「巻を掩いて讀むを卒うるを欲さず」というのは、本來當然の態度であらう。ここで荆氏が引く二つの詩は、ともに梅村の變節物の代表的な作品である。特に「寄房師周芮公先生」四首は、「惆悵平生負所知——日頃からのあなたの期待に負いてしまったために哀しんでおります」の句にはじまり、以下自分と同様に召されながらこれを拒絶した師をうらやみつうたいつがれるが、第二首にはご丁寧にも自注が附されており、「晉江の黃東崖先生（景昉）わ

れのこの詩中の一聯に和して曰く、微書鄭重にして眠餐損われ、法曲『秣陵春』をさす）凄凉にして涕淚横たわる、と知己の言、これを讀みて感歎せり」という。世に流布させるにあたつて、後からわざわざこの言葉を書きつけた梅村の心境は想像するに難くない。彼のこれらの作はすべて自らの變節に對する言い譯——梅村が錢謙益に對して用いた語に従えば「解嘲」だったのである。

では何故に人々はかかるめめしい作品を愛したのか。否、今日に至るまでこれらの作品が我々をひきつけてやまないのはなぜか。我々には荊如棠のように素直にわりきつて梅村の作品を否定しすることはできない。その作品を創り出した折の梅村の心境に不純なものがあつたと認めた上で、なおかつその言葉には感動せざるをえないのである。その理由は何か。これは世の轉向文學全體の評價とも關わつてくる問題であらう。

吳梅村と同時代の一流詩人としては、これまでに再三にわたつて言及してきた四人——陳子龍・顧炎武・錢謙益・龔鼎孳の名をあげることができよう。彼らの詩人としての

才能はおそらく梅村に劣るものではなく、その生前における名聲においては、錢謙益の如きは梅村をしのいでさえた。しかし彼らの詩は梅村ほどには世から愛されることがなかった。なぜか。

この四人に梅村を加えた五人の生き様は、まさにそのまま當時の士大夫のとりえた五通りの道を象徴するものに他ならない。陳子龍の如くあくまでも抵抗し、節を守つて死ぬか、顧炎武の如く屈することなく生き抜き、とことんまで抵抗を繼續するか、あるいは錢謙益の如く一旦は屈服してみせながらも野にあって面従腹背の態度をとつて抵抗をつづけるか、あるいは龔鼎孳の如くあえて屈服し、相手の體制内に入つて自民族の地位向上をはかるとともに、あわよくば體制を内部から破綻せしめんとするか。そして残る一つが梅村のつた道である。陳子龍の如く死ぬことは顧炎武の如く生きて戦うことに比べればまだしも容易といえよう。しかし顧炎武の道も、錢謙益・龔鼎孳の如く、あらゆる汚名を着、はるか後世に至るまでの惡罵の對象となりつつも、なお生命を賭して抵抗を續けるそのたとえようも

ない悲慘さに比べれば、まだしも容易であるかもしれない。ともあれこの四つの道はどの一つをとっても容易なものではなかった。それゆえ、大多數の人間が選んだのは、第五の道——吳梅村の歩んだ路線だったのである。彼らは陳子龍の如く死ぬこともできず、顧炎武の如く抵抗を続ける勇氣もなく、といって錢謙益や龔鼎孳の如く汚名を着るのも嫌だった。そこでとりうる道はただ一つ、免れられる中はおとなしく郷里にひきこもり、強いられば、あるいは生活に迫られれば、澁々という顔をして出仕することであつた。つまり梅村はこの時代の大多數の士大夫たちの代表選手だったのである。彼らは梅村の詩の中に自己の苦惱を見、自己の悲しみを見、梅村の苦惱や悲しみを正しいものとしてとらえ、その變節を正當化することにより、自分自身の變節をも正當化することができた。既に出仕してしまった者たちは、自らを梅村に同化することによって自身の變節をもやむをえなかったものと感じ、まだ出仕していないものも、いつ何時同じ様な運命が自分にもふりかかるかもしれないという危惧ゆえに、梅村に感情移入しえた。これが

梅村のこの種の詩がかくも人々に愛された理由であらう。彼はいかにもいかなる場合においても全く主體性というものを持たず、時流に流されていった凡人であり、彼の如き凡庸な人物が、あまりにも不釣合な文學的才能を持つて生まれたことに彼の悲劇はあつた。しかしそれゆえにこそ彼は世の凡人たちの偶像となり、それゆえにこそ彼の詩は不朽のものとなりえたのである。人は陳子龍・顧炎武を思うとき、常人の域をはるかに超えた英雄的人物を思いうかべ、錢謙益の名を聞くと何か理解不能の怪物を見るような思いを抱く。しかし梅村は、いかにも天才詩人ではあろうが、結局のところ我々と同じ人間であり、我々は充分に彼の哀しみを理解することができる。つまり梅村にとっての個人的悲劇の要因は、詩人としての梅村にとっては最大の財産だったのである。ここに我々はかつて韓愈が柳宗元を評して、その不幸が文學的には幸いしたといった有名な逆説が、今再び極めて皮肉な形でくりかえされているのを見ることのできるのである。

そして乾隆帝が吳梅村を愛好したのも、おそらくは彼の

この特徴に由來するものであった。吳梅村の詩は、錢謙益の詩が最も危険であつたのとはまさに對照的に、體制にとつて最も安全な文學だつたのである。錢謙益が人々に教えるのは、たとえ一度屈服しようともそれによつて精神までも征服されることなく、鬭争を繼續せよということである。これほど體制にとつて危険な思想はあるまい。これに對して梅村は轉向を容認する。そしてその一方では明の滅亡を大變美しい言葉でうたう。體制側にとっては、自らの滅ぼした王朝を美しくなつかしむだけであれば何一つ問題は無い。明の殉國者をうたつた作品も、「雁門尙書行」の孫傳庭や、「哭志衍⁽⁹²⁾」における吳繼善の如きは、李自成や張獻忠に敗れて死んだ人々であり、清朝にとってはむしろ顯彰に値しよう。「臨江參軍」における盧象昇は清と戰つて死んだ人物であるが、詩の眼目は楊嗣昌をそしめるにある。より具體的に盧象昇の最期をうたつた「讀楊參軍悲鉅鹿詩」

『感舊集』卷二が『梅村集』『家藏稿』のいづれにも收められていないのは、甚だ示唆的であるといえよう。その他史可法らをもうたうが、その英雄的行爲をうたいあげるこ

とはあつても、清の軍隊の暴虐をうたうことはほとんどない。そもそも多少なりともまずい詩句を含む作品は、『梅村集』成立段階で既に作者自身によつて削除されてしまつていたのである。かくて梅村の詩は「容賞を仰邀せるも偶然にはあらざるなり」ということになる。こうして彼の詩は不滅のものとなつたのである。

最後に彼の文について簡単にふれておきたい。冒頭にあげた『四庫提要』には、「ただ古文はつねに參ずるに儷偶をもつてす。既に齊梁に異なり、又唐宋にもあらず、殊に正格に乖^{へん}う」とある。おそらくこの評價が影響してか、梅村の集は一般に詩集のみが單行し、文は讀まれることが少ない。では梅村の文は何ら價值をもたないのか。彼の文は、もとよりその詩における成就に比すれば及ぶべくもないが、やはり一つの存在理由を主張しうるものであるように思えるのである。

『提要』は彼の文が古文でありながら對句を多く用い、といつて生粹の駢文というわけでもなく、まことに中途半端な、「正格に乖う」存在であるとする。この傾向は確か

に彼の文集全體にわたって認められる特徴である。その文は、ほとんどが駢文と古文の中間の如きスタイル、つまり對句は多用するが典故はあまり用いず、韻もふまない、達意の文なのである。無論中には例外もあり、「佟母劉淑人墓誌銘」「封夫人張氏墓誌銘」⁽¹⁹³⁾の如きは、さながら陳維崧の作品の如く大量の典故を用いた華麗な駢儷體でかかれてゐる。ただこの二人の墓誌銘が、それぞれ修彭年・梁化鳳という清朝の權力者の母のために書かれたものであることは、さきにみた詩における彼の特徴——典故多用は儀禮的な作に多い——を想起させる。事實、おそらく彼が最も心魂を傾けて書いたであろう親友穆雲桂の墓誌銘⁽¹⁹⁴⁾の如きは、典故をほとんど用いない平明な表現によつてゐるのである。一方純粹な古文というべき作品も皆無ではなく、「復社紀事」⁽¹⁹⁵⁾「柳敬亭傳」⁽¹⁹⁶⁾の如きはほとんど駢文臭を伴わない。ただその古文は、おそらく唐宋の古文ではなく秦漢の古文を目標としたものであるらしく、大變讀みにくい。題材の性格からしても、彼の歴史家意識と復古派的性格が結合して『史記』『漢書』の惡しき模倣へと走らせたのであらう。

ではこの梅村の駢に似て駢ならず、散に似て散ならずという文體をいかに評價すべきか。ここで唐宋派への歸依を表明していた梅村の文體が駢文に近づかなければならなかつた理由を考えておかねばなるまい。さきに復社の項で述べたように、長い間世から輕視されてきた駢文を復興させようとした最初の人物は張溥であつた。その弟子たる梅村が駢文を書くのは、むしろ當然のことである。ただその駢文は甚だ古文に近い。ここで清朝における駢文史の展開を想起してみると、清初駢文は文采・本色の二派にわかれるが、本色派はやがて古文に近づき、「駢散不分」の傾向を示すに至る。また古文の側からも駢文への接近が企てられ、陽湖派の古文の如きは甚だ駢文に近い。そしてこれら駢文の擔い手となつたのは、實に阮元以下の漢學者たちであつた。この點とさきに述べた復社が漢學成立の一母體と考えられることを重ねあわせると、吳梅村の文が清代文學史の中で占めてゐる地位は明らかとなる。彼の文は「駢散不分」の遠祖、漢學派のいわば異端の兄にあたるものだったのである。

この傾向は彼の文學全體にも認めうるものである。その經書に則って詩文をつくれという主張、學問を根底とし、それを總花的に並べてみせる、一步誤れば愚劣な知識自慢にも陥りかねない詩風は、彼を清詩の出發點におくものであり、無數の追隨者を生んだ理由でもあらう。しかし彼は同時に、復古派・復社というすぐれて明代的な團體の血脈をつぎ、俗文學の愛好、また本稿ではふれなかったが佛教への傾倒といった點にあらわれている明代人特有の自由な精神を持ち、明代最大の文人王世貞を崇拜しつつけた、明代の傳統の上に立つ最後の詩人でもあった。つまり彼はその人生にふさわしく、その文學においても最後の明代人にして最初の清代人であったのである。

注

- (113) 『臚北詩話』卷九。
- (114) 『家藏稿』卷頭に掲げる。また『牧齋有學集補』にも收めるも、前半のみである。
- (115) 『清詩紀事初編』卷三計東の項。
- (116) 「吳梅村詩輯佚」『明清詩文研究資料集第一輯』(一九八

六上海古籍出版社) 所收。

- (117) 四部備要本『宋文憲集』に附されている。
- (118) 前篇『中國文學報』第三十九冊) の注(91) 參照。
- (119) 『牧齋有學集』卷一。
- (120) 『家藏稿』卷八で「題歸玄恭僧服小像」のあとには、女性に贈ったとおぼしき「戲贈」十首、「亂後過湖上……」一首をはさんで「聽朱樂隆歌」六首(朱樂隆は常熟の樂人、) について「觀棋」六首がくる。『家藏稿』の排列が製作時期を忠實に反映していることは、錢仲聯氏が『吳梅村詩補箋』(『夢苕齋專著二種』(一九八四中國社會科學出版社) 所收) で再三說かれる通りである。
- (121) 黃媛介は當時錢謙益の絳雲樓に身を寄せていた。
- (122) 『家藏稿』卷六。
- (123) 『牧齋有學集』卷五。
- (124) 『牧齋有學集』卷十二。
- (125) 『牧齋有學集』卷四。
- (126) 『牧齋有學集』卷十七。
- (127) 『牧齋有學集』卷二十四。
- (128) 「二王子今體詩引」「黃庭表忍菴詩序」(『牧齋有學集』卷二十)。
- (129) 「題顧伊人詩」(『牧齋有學集』卷四十八) 「顧麟士詩集序」(『牧齋有學集』卷十九)。
- (130) 『牧齋有學集』卷二十。

(131) 「與季滄葦侍御書」(『歸莊集』)(一九八四上海古籍出版社) 卷五) にこの旨見える。

(132) 「吳梅村先生六十壽序」(『歸莊集』卷三)。
(133) 注(88)。

(134) 「題錢黍谷畫蘭」(『家藏稿』卷二十)。

(135) 『家藏稿』卷二十八。

(136) 『家藏稿』卷三十。

(137) 『家藏稿』卷五十四。

(138) 『家藏稿』卷五十四。

(139) 「龍眠」とは安徽省桐城近郊の山名である。當時桐城出身の文人としては、錢秉鐙以外に阮大鍼・方以智がいるが、阮氏がここでいう人物ではありえないことはいうまでもなく、方以智も鼎革後は南方を轉々としており、やはり不適格である。

(140) 全祖望「陸麗京先生事略」(『鮚埼亭集』卷二十六)によると、陸圻ら登樓社の詩體を世人は「西陵體」と呼んだという。あるいは西冷との音通からきた名稱か。

(141) 『家藏稿』卷五十四。

(142) 「與吳梅村祭酒書」(『愚庵小集』卷十)。

(143) 『家藏稿』卷二十七。

(144) 『家藏稿』卷三十二。

(145) 吉川幸次郎「錢謙益と清朝『經學』」(全集第十六卷五十五頁以下)。

吳梅村研究(後篇)(小松)

(146) 『牧齋有學集』卷四。

(147) 拙論「吳偉業の戯曲について」(『東方學』第七十一輯) 参照。

(148) 例えば前篇注(9)で引いた『列朝詩集』の事例の如きは、その代表的なものといえよう。

(149) 『梅村詩話』陳子龍の項。

(150) 『香祖筆記』卷二。

(151) 『藝苑卮言』卷四。

(152) 「誥贈奉議大夫祕書院侍讀徐君坦齋墓誌銘」(『家藏稿』卷四十五)。康熙九年、つまり梅村の死の前年にかかれていた。その中で梅村はずっと以前に墓誌銘を依頼されながら放置しておいたところ、出世した徐乾學が都から手紙を寄せてせかすので、「やむをえずその狀を刪取して」この文を草すという旨をくどくどしく書きつらねている。

(153) この點については大平桂一「王漁洋の古詩平仄論——七言古詩を中心として——」(『東方學』第七十三輯)に詳しい。

(154) 『堯峰文鈔』卷二十九。

(155) 「吳偉業『永和宮詞』における白居易『長恨歌』および元稹『連昌宮詞』の影響」(『徳島大學教養部紀要』十七) 及び「吳偉業『琵琶行』における白居易『琵琶行』の受容」(『中國文學論集』(九州大學)十)。

(156) 『吳詩集覽』卷四。

- (157) 『何大復集』卷十四。
 (158) 『家藏稿』卷三。
 (159) ともに『家藏稿』卷二十。
 (160) 『家藏稿』卷九。
 (161) 『家藏稿』卷十。
 (162) 『家藏稿』卷三。
 (163) 『家藏稿』卷十一。
 (164) 例えば「雁門尚書行」。
 (165) 後に引く「吳門遇劉雪舫」(『家藏稿』卷一)など。
 (166) 彭功智編『中國歷代著名敘事詩選』(一九八五黃河文藝出版社)・丁力選『歷代敘事詩』(『花城袖珍詩叢』の一、一九八五花城出版社)など。
 (167) 『櫛机閑評』は崇禎末年もしくは弘光元年(順治二年頃)の成立と思われるが、孫楷第『中國通俗小說書目』によると、『魏忠賢小説斥奸書』『警世陰陽夢』はともに崇禎元年、即ち魏忠賢失脚の直後に出版されている。
 (168) 注(102)。
 (169) 更に張岱『陶庵夢憶』『冰山記』には、張岱が他人のつくった魏忠賢ものの戯曲を改作して『冰山記』と題し、城隍廟で上演した顛末が詳しく記されている。
 (170) 『清詩紀事初編』卷三吳偉業の項。
 (171) 『家藏稿』卷三。
 (172) 『梅村詩抄小傳』。

- (173) 『家藏稿』卷一。
 (174) この初句は『玉臺新詠』卷一「古詩」八首の第六首冒頭「四坐且莫誼、願聽歌一曲」と酷似している。この事實は梅村が古代歌謡の形式を意識していたことを示すものであろう。ただ「閩州行」が「我欲竟此曲、流涕不復道」という句で結ぶ點からみても、作者が「古詩」の句を借りながら、語り手による梓組構造をよりはっきり意識していたことは明らかであろう。
 (175) 『家藏稿』卷十五。
 (176) 『家藏稿』卷十二。
 (177) 『家藏稿』卷十二。
 (178) 『家藏稿』卷十三。
 (179) 『家藏稿』卷十四。
 (180) 松下忠前掲書六十八頁。
 (181) 『家藏稿』卷十二。
 (182) 『家藏稿』卷十四。
 (183) 『家藏稿』卷九。
 (184) 『家藏稿』卷六。
 (185) 「過淮陰有感」二首の二(『家藏稿』卷十五)。
 (186) 『家藏稿』卷十五。
 (187) 『家藏稿』卷六。
 (188) 正確には「寄房師周芮公先生」四首并序(『家藏稿』卷十五)。

(189) 正確には「懷古兼弔侯朝宗」『家藏稿』卷十六。

(190) 『家藏稿』卷二十二。なおこの詞はしばしば梅村臨終の作といわれるが、俞平伯氏がつとに指摘されたように、談遷の『北遊錄』に録述されている以上、順治年間在京時代の作であることは明らかであろう。詳しくは俞平伯「吳梅村絶筆詞的質疑」(一九六二年二月二十四日『光明日報』また『論詩詞曲雜著』一九八一上海古籍出版社)参照。

(191) この自注は『家藏稿』にはなく、『梅村集』系諸本のみ
に附されている。

(192) 『家藏稿』卷一。

(193) ともに『家藏稿』卷四十八。

(194) 注(35)参照。

(195) 『家藏稿』卷二十四。

(196) 『家藏稿』卷五十二。

(後記) なお、吳梅村と『南詞新譜』の関係については、廣島
大學の大木康氏からのご教示によるところが多い。ここに記
して謝意を表させていただきたい。